平成 27 年度
修　士　論　文

大津波災害からの女性たちの主体的な生活と仕事の再建活動に関する研究
―宮城県石巻市と女川町を対象に―

Study on the work and life's reconstruction activities of women from the tsunami disaster
―A case study on Ishinomaki region,Miyagi Prefecture―

首都大学東京大学院　都市環境科学研究科
都市システム科学域

14887414　童亜斐

指導教授　市古太郎

第一章　序論

1－1 研究背景

東日本大震災後 4 年半が経過し、被災地では復興が進んでいる。災害による被害については避難生活だけでなく、復興過程における女性の状況についてもいくつもの問題が注目される。災害時、男性と女性とは同じ災害を経験し、同じ地域に暮らしていても、被災の状況や回復力は異なるものであった。一例として、女性が男性より多く犠牲となったことが挙げられる [1]。また、被災地において避難生活あるいは生活再建の影響により、様々な不安･悩み･ストレスを抱えた女性に対して開設された臨時相談窓口での受理件数の集計結果[1]により、平成 24 年（2012 年）から平成 26 年（2014 年）までの３年間のデータからは、宮城県における 30 代から 50 代の女性が一番ストレスが高いことが指摘できる。そして、相談者総人数のうち無職女性は５割以上という圧倒的な割合を占めている（表１－１）。

表１－１　宮城県相談事業集計結果

相談受付期間	受理件数（男女別）	年代別（女性）	無職（女性）
2012.2.11～2012.3.31	男：248 件、14.6% 女：1328 件、78%	40 代（274 件、18.7%） 30 代（263 件、18%） 50 代（223 件、15.2%）	741 件（50.6%）
2012.4.1～2013.3.31	男：564 件、8.3% 女：5127 件、76.9%	40 代（1398 件、25.1%） 30 代（897 件、16. １%） 50 代（727 件、13%）	3212 件（57.6%）
2013.4.1～2014.3.31	男：297 件、5.6% 女：4641 件、87.3%	50 代（1117 件、24.5%） 40 代（1033 件、22.6%） 30 代（668 件、14.6%）	2522 件（55.3%）

（出典：内閣府『男女共同参画』）

また、阪神・淡路大震災の経験と調査をきっかけとして、災害リスクを軽減するための政策や計画作成、意思決定過程に女性の参加を促進することに決まったが、東日本大震災における被災状況に関して、女性の視点が不十分という事実を指摘した。

一方、地域を支える女性たちの力も注目されている。東北の復興を担う女性たちを応援している複数の特定非営利活動法人（以下「NPO 団体」と）が活動している事実も見られた。例えば、「女性雇用の機会」を位置づけ、被災地の女性たちのための経済的な支援に取り組んでいる。このような女性の活躍は震災後の生活再建だけでなく、地域の発展や暮

らしやすい社会づくりにも重要な役に立つ女性たちは自分の役割を担っている。

1−2 既往研究

「女性問題」に関わる研究は復興期より、震災直後の避難時期に関する研究が多い。

１－２－１　自然災害における女性問題について

震災後、女性が男性より不利な形になることには様々な要因が考えられる。池田（2012）[2]はジェンダーの視点で東日本大震災の被災地で性別や立場による被害と被災経験が違う原因を分析した。池田は、応急対応期（避難生活）によく起こる課題を、生活環境、安全・安心、物質の不足と管理、固定的性別役割の強化、心身の健康での関係とした。また、復旧・復興によく起こる課題を、家族・地域コミュニティでの関係（DV など暴力の増加、地域孤立など）とした。東日本大震災の支援において、災害時にはジェンダーに基づく性別役割分担が強化される事により、女性の労働負担が増加し、また復興資源へのアクセスが女性に不利になる事を実証した[3]。

遠藤（2012）[4]は震災直後、支援活動を行った女性たちの力が掘り起こされる実態を指摘したが、ジェンダー視点の不足により生じた問題を分析した。それは、日常的から震災時に役割を担っている女性が見落とされたこと、女性に必要な物資の支援には偏りがあったこと、ジェンダーの視点に立った支援活動の指針をすらないこと、災害とジェンダーの課題は社会全体に広がらなかったこと、女性たちへ過大な負担の上に「絆」が重要視されること、五つの問題に整理した。

事例研究から、災害の男女差にはいくつかの共通した傾向を指摘できる。１）災害により女性が男性より多く犠牲する　２）女性と子供を対象とした暴力が増加する　３）地域の自主防災組織における多く担当は男性であり、防災や復興に関する女性の視点を反映することは難しい　４）避難所でも在宅避難生活においても、固定的な性別役割分担が強化され、女性の労働負担が増加するということである。

1−2−2　女性の回復力について

林（2012）[5]は災害における長期的な復興に向かう回復力（レジリエンス）について検討した。というのは、自らにより状況の変化に応じてリスクを評価すること、大きな変化に対する減災対策をとること、被害が出た場合に柔軟に回復できる能力を指す概念である。いわば、一時的に失った機能を回復するため、地域レジリエンスの向上を図り、コミュニティの形成が重要である。

辰己 ら（2014）[6] は女性たちの復興経験では、女性特有の仕事と家族関係、将来への希望、外部支援に必要性、女性リーダーの存在、グループ活動の可能性の５点を挙げていた。女性たちが夫婦共に働くことでは家族関係によって可能になり、子育ての役割では将来への希望につながっている。また、外部支援が女性の活動に適切な資金を入ること、なお外部と接触をすることができる女性リーダーの存在が女性たちの自立に重要な影響を持っている。加えて、既存のグループ活動が女性たちの社会的活動としても機能もある。要するに、この五つの要因が作用して復興過程に女性たちは経済的な自立だけでなく、家族や地域社会の発展にも重要な役割を担うことが可能になると考えられている。

1－2－3 災害リスクを削減する可能性について

池田（2011 a）[7]は女性の脆弱性の本質主義を批判され、バングラデシュの沿岸地域の被災地を事例に、女性が災害に立ち向かう力を持っていることを指摘した。具体的な施策として、①防災に関する行政的取り組みが整備され、住民組織と NGO などを連携した「防災の行政・自治組織の整備と女性の参加」、②防災計画などの意思決定には女性がリーダーになるだけでなく、一般住民も参加できるように工夫されたことである「ジェンダー視点による脆弱性と回復力の分析」、③防災の専門職あるいは避難誘導ボランティアなどの役割を担っている「女性の防災関係者の育成」、④「支援組織へのジェンダー視点の導入」など４項目に整理した。また、池田（2011 b）[8]は住民参加型の地域防災が災害脆弱性のジェンダー格差を解消する可能性を検討した。女性たちが地域防災の主体とし防災事業に参加すること、地域社会が男女別の災害経験の違いを認識すること、また、女性の災害脆弱性を減少し、回復力をアップすることを前提とし、防災・減災と日常的なジェンダー不平等との関係性を分析した。

岡庭（2013）[9]は災害リスクを減少し、有効であると考えられるジェンダーのダイバーシティを着目し、災害時の男女別の現状と課題について検討した。災害時にジェンダーによる性別役割分担が強化されることに対し、防災・災害復興分野における意思決定に女性の参画拡大を継続して求めていくことが必要だと指摘した。

1－2－4 既往研究の整理

以上のような研究は震災により女性は男性より弱い立場に置かれる事実はある程度明らかになっている。一方で、女性は回復力を持っていることも指摘できた。要するに、男女被災差の要因については身体的・社会的要因が相互に影響しあっていることは明らかになったが、震災後、女性たちが自立支援を行うきっかけと日頃からの社会要因との関係を分

析した研究は少ない。

そこで本研究では、震災後に活動を立ち上げたきっかけの実態と社会的な要因と合わせて検討し、復興過程における支援団体の取り組みの変化を考察することを目的とした。

1－3 研究目的

本研究では、被災地において女性たちが立ち上がった生活再建活動に着目し、取り組みの変化も着目しながら、考察していく。具体的に、以下のように示す。

１）震災後、被災地における女性たちが活躍している原因については、女性の視点が入っていないことと女性たちは支援される対象ではなく、支援者として、復興の一翼を担う「主体」としての姿が求められていることである。

２）女性を対象とする支援は、子育て活動および経済的な面から活動を行っているのは基本的な考え方となる。そのため、子育て環境の整備、また女性起業への支援が重要である。

３）女性向けの支援にも関わらず、男性の参加も求めているのではないか。

なお、調査対象として、子育て女性と高齢者に向け、支援活動を行っている団体である。だが、女性たちが活動を立ち上げた原因および社会環境との関係をアプローチするためには、復興において女性が担っている役割が復興プロセスの中に位置づける必要があると考えている。

1-4 研究方法

研究の方法を以下に示した。なお、具体的なインタビュー項目については付属資料に添付する。

1） 資料収集

関連行政資料、研究報告などを収集して検討する。災害による影響をより強く受けやすい女性たちが震災前から社会にあった暮らし環境、また震災後に取り巻く状況を明らかにすることを目的とした。

2） 現地ヒアリング調査

収集した資料を検討した上で、さらに東日本大震災後、被災地における女性への支援を行うNPOの代表に対し、ヒアリング調査を行う。各方面から避難生活や生活再建に向けた

支援活動を行っている団体の代表に支援者としてどのような視点や経緯で活動を行ったのか、また活動において被災者のニーズをどのように応えたのかなどについて考察する。

3） 個別インタビュー調査

地域における子育て支援活動を行う NPO の代表に対し、現地ヒアリング調査で得た情報のうち被災時の女性たちの生活実情および支援者として気づいたことに関するインタビューを行う。

4） 立ち上げた活動への参与調査

選定した研究対象のプログラムを参加し、利用者にインタビュー調査を行い、取り組みの変化を把握する。

1－5　論文の構成

本論文では、全５章から構成される。第２章以降の内容は以下のように説明する。

第２章では、研究対象の選定について説明する。

第３章では、東日本大震災後、被災地における女性を取り巻く状況を整理し、石巻地の全体像を明らかにする。

第４章では、被災地に立ち上げた活動を考察し、調査により得られた結果を分析する。

第５章では、子育て支援を行っている団体の取り組み変化、また利用者の状況について考察する。

第６章では、結論を述べる。

第二章　研究対象

2－1 調査地域の選定

本研究では宮城県の石巻地域を対象地域として選定した。

1） 被害状況[1]

2011 年に起きた東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）において、石巻市の被害状況（犠牲者数と建物の被害数）が一番多かった。（表２－１）

表２－１　東日本大震災の被害状況

		人的被害			住家被害			
		死者	行方不明	負傷者	全壊	半壊	一部破損	浸水
全国		19,335	2,600	6,219	124,690	275,118	764,843	13,582
東北地方	岩手県	5,127	1,129	211	19,595	6,570	18,939	6
	福島県	3,559	225	183	18,054	75,595	162,478	1,412
	宮城県	10,538	1,242	4,145	82,998	155,128	224,192	7,796

※負傷者数は重傷・軽傷・程度不明を含め　（出典：消防庁災害対策本部）

２）石巻市男女共同参画の状況[2]

震災前から、石巻市における PTA 会長および自治会等の会長の女性会長登用率は、県平均を下回っている。（表２－２）

女性委員の割合が低いということは、地域における多様な政策・方針決定過程への女性の参画も少ない、また震災時、女性の視点も入れにくいとこうことを意味していると考えられる。

表２－２　石巻市男女共同参画の状況

重点課題	指標項目	平成 22 年度（2010 年）		平成 23 年度（2011 年）		平成 24 年度（2012 年）	
		石巻市	県平均	石巻市	県平均	石巻市	県平均
政策形成および方針	審議会・委員会等への女性委員の登用率	26.60%	23.60%	23.10%	24.20%	24.30%	24.20%

決定の場への女性の参画促進	市議会議員委における女性の割合	6.30%	8.70%	6.50%	9.50%	6.90%	9.80%
	市の管理職における女性の割合	6.30%	13.50%	9.30%	14.60%	6.30%	14.30%
地域における男女共同参画の推進	PTA 会長における女性の割合	4.70%	17%	1.60%	16.70%	7.90%	21.10%
	自治会等の会長における女性の割合	1.40%	3.60%	1.40%	3.70%	1.40%	3.80%

（資料：石巻市男女共同参画推進課掲載データをもとに作成）

2−2　研究対象の選定

宮城県の特定非営利活動法人は 379 団体である。そのうち、石巻市における活動を行っている NPO は 59 団体[3]である。（表２－３）

表２－３　宮城県の特定非営利活動法人の活動分野および法人数（2015 年 8 月 31）

活動分野	宮城県	石巻市	比率（%）
保健，医療又は福祉の増進を図る活動	135	22	16.3
社会教育の推進を図る活動	17	1	5.9
まちづくりの推進を図る活動	70	11	15.7
観光の振興を図る活動	1	1	100
農山漁村又は中山間地域の振興を図る活動	2	1	50
学術，文化，芸術又はスポーツの振興を図る活動	52	9	17.3
環境の保全を図る活動	40	9	22.5
災害救援活動	13	4	30.7
地域安全活動	1	0	0
国際協力の活動	7	2	28.6
男女共同参画社会の形成の促進を図る活動	1	0	0
子どもの健全育成を図る活動	22	6	27.3

情報化社会の発展を図る活動	3	3	100
科学技術の振興を図る活動	1	0	0
経済活動の活性化を図る活動	5	2	40
職業能力の開発又は雇用機会の拡充を支援する活動	2	1	50
消費者の保護を図る活動	1	0	0
前各号に掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡，助言又は援助の活動	6	2	33.3
集計	379	74	19.5

※解散法人・認証取消法人・認証撤回法人は除く
（資料：宮城県「特定非営利活動法人連絡先一覧」掲載データをもとに作成）

ジェンダーの視点から考えた災害に強い社会に関して、震災後、早く復興しできる要因では[4]、1. 子育て・介護　2. 産業　3. 就業・収入　4. 地域からの孤立　5. 復興計画でした。震災から、宮城県石巻地区における女性たちの主体的な生活と仕事の再建活動には、どう取り組みに進んでいくのかを考察するため、それを参考に調査対象の選定を行っていく。

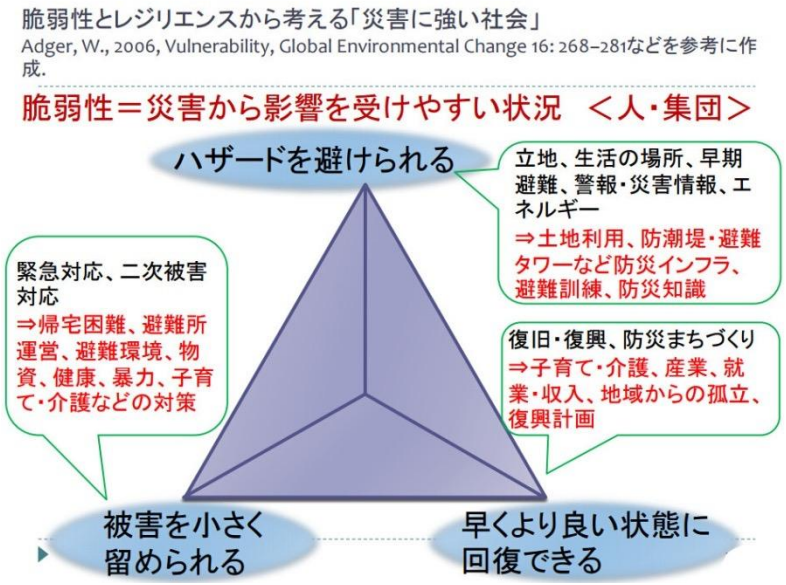


図２－１　脆弱性とレジリエンスから考える「災害に強い社会」
（出典：池田恵子 2014）

まず、地域づくりに関わる活動を行う団体は 11 団体である。そのうちに、震災前活動を行っている団体数は 5 個である。そのため、内閣府に所属し、また、震災前に子育て関

係で活動を行い、震災後から復興のために石巻市に暮らしている住民並び石巻市内及び周辺地域の団体が互いにネットワークを構築することを目的とする「石巻復興支援ネットワーク」(「やっぺす」) を選定した。

次に、石巻地区における高齢者を対象とした活動を行っている団体は 22 団体である。そのうちに、震災前活動を行っている団体数は 14 団体である。だが、主に介護サービス事業であるため、女川町を中心に高齢者の自立支援を行っている一般社団法人であるコミュニティスペース　うみねこ (「ゆめハウス」) を選定した。

さらに、子育て支援事業を行う団体は 6 団体であるが、全員震災後立ち上げた団体である。要するに、震災前、子育て支援に関する NPO はなかった。そのうちに、震災後いちばん早く支援活動を始まった団体である「ベビースマイル石巻」を選定した。

調査対象の概要は以下に示す。(表２－４)

表２－４　調査対象の概要

	現地ヒアリング調査		個別インタビュー調査		参与調査	
日付	2015.2.23	2015.2.24	2015.2.24	2015.12.11	2015.9.16	2015.12.12
対象	「やっぺす」	「ゆめハウス」	「ベビースマイル石巻」	「ゆめハウス」	「ベビースマイル石巻」	
出席	京都府立大学男女共同参画推進室、市古先生、筆者	市古先生、市古研究室メンバー７名、筆者	市古先生、筆者	筆者	筆者	
目的	震災後、子育て支援から支援対象や活動範囲拡大する原因、取り組みについて把握するため	震災後、仮設住宅に女性への支援から被災者の自立支援の取り組みについて把握するため	震災時、妊婦として親子居場所づくりを立ち上げた原因、震災による影響などについて把握するため	被災者の生活再建に向け、活動の様子、利用者の属性などについて把握するため	復興期における拠点としての役割、活動の様子、利用者の属性などについて把握するため	

第三章　被災地における女性を取り巻く状況

災害リスクを削減する可能性を検討するため、本章では、震災後に女性を取り巻く状況を把握する上で、日常に潜む災害脆弱性の要因を明らかにする。

3－1　東日本大震災における震災対応状況

3－1－1　震災の影響による男女別

１）被害状況（男女別・年齢階層別死者数）

男女で異なる被災状況などの報告が多くあった。そのひとつは、女性は男性より多くの犠牲になったことである。2011 年東日本大震災の主な被災地である東北 3 県（岩手県・宮城県・福島県）における死者数（図３－１）では、女性 7,036 人、男性 5,971 人、性別不詳 128 人となった。そのうち、女性が男性より 1,000 人程度多かった。

日頃から災害に対する男女で異なるニーズとその対応、女性への支援のあり方などを強化する必要があると考えられる。

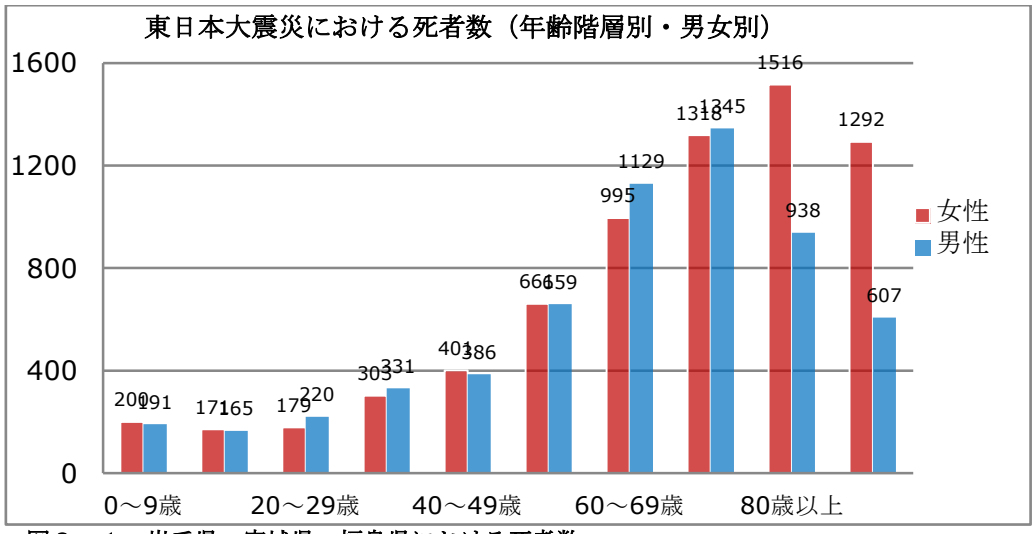


図３－１：岩手県・宮城県・福島県における死者数

（出典：内閣府「平成 23 年防災白書」掲載データをもとに当図で作図）

2）就労状況

表３−１　岩手県・宮城県・福島県の雇用動向（男女別）

		有効求職者数				
		2011 年 2 月	2011 年 5 月	2011 年 11 月	2011 年 2 月	2011 年 11 月
岩手県	**男性**	16,164 (−12.1)	21,325 (4.3)	14,692 (−4.8)	15,694 (−2.9)	13,096 (−10.9)
	女性	17,630 (−2.0)	24,601 (26.0)	18,964 (18.1)	19,505 (10.6)	14,782 (−22.1)
宮城県	**男性**	26,108 (−10.1)	36,551 (15.0)	27,350 (1.4)	25,829 (−1.1)	21,243 (−22.3)
	女性	26,769 (−6.2)	39,387 (26.7)	31,913 (15.7)	30,691 (14.7)	24,411 (−23.5)
福島県	**男性**	20,272 (−14.7)	25,214 (−3.3)	20,462 (−2.3)	19,515 (−3.7)	16,471 (−19.5)
	女性	21,233 (−5.6)	28,304 (14.1)	23,049 (8.4)	22,529 (6.1)	17,136 (−25.7)
３県合計	**男性**	62,544 (−12.1)	83,090 (6.1)	622,504 (−1.3)	61,038 (−2.4)	50,810 (−18.7)
	女性	65,632 (−4.9)	92,292 (22.4)	73,926 (13.9)	72,725 (10.8)	56,329 (−23.8)

注：１、厚生労働省「被災３県の現在の雇用状況（男女別)」より作成

２、（ ）内は、対前年同月増減率（%）

東日本大震災により多くの人が職を失い、就職者数が増えてきた。岩手県、宮城県及び福島県における雇用動向(表３－１）から見ると、女性の就労意識が高いと言える。

復興向けた建設業の労働需要が強いことは女性に相対的に悪い雇用状況が出る可能性がある。それにより、震災の影響で男女の雇用格差を拡大させたことも明らかにした。しかし、被災地の回復により、小売業などに関する女性の採用が増加する可能性もある。そのため、復興過程における女性の回復力が期待される。

３）子育て女性の有業率

女性の有業率を都道府県に見ると（表３－２)、全国における育児をしている者の有業率の 52.4 である。最も高い島根県(74.8%)と比べ、被災地の岩手県は 64.3、福島県は

56.8、宮城県はたった 53 であった。

表３－２　2012 年岩手県・宮城県・福島県の「25～44 歳の育児をしている女性の有業率」

都道府県	育児をしている女性			
	総数(人)	有業者(人)	無業者(人)	育児をしている者の有業率（%）
全国	5488.7	2875.5	2613.1	52.4
岩手県	45.7	29.4	16.4	64.3
宮城県	96.2	51.0	45.3	53.0
福島県	69.9	39.7	30.3	56.8
３県合計	211.8	120.1	92.0	56.7

（単位：千人，%）　出典：「労働力調査結果」（総務省統計局）

3－1－2　各時期に起こる課題

震災後、時期を「応急対応期（避難生活)」、「復旧・復興期」を分け、各時期に直面した課題を分析する。そのため、内閣府男女共同参画局、また「東日本大震災女性支援ネットワーク」が行った調査資料を整理し、主要な問題点を以下に述べる。

1、 応急対応期(避難生活)

①生活環境

避難所の生活環境に関わるニーズおよび要望には、「交流の場づくり」、「生活物資提供」「情報提供」「安心・安全の確保」など男女に大きな差は見られなかったことが把握された。それ以外は、避難所運営に女性の参画が不十分なことにより、プライバシーの問題も起こった。

②安全・安心（治安、暴力など）

阪神・淡路大震災の経験を参考し、女性の参画もある程度求めているが、東日本大震災における女性の視点が足りない課題もいくつか取り上げった。例えば、避難所の運営者やスタッフの多くが男性で、生理用品等について要望が言いにくかったこと。また、避難所に男性の目線が気にならない更衣室・授乳室など女性が安心しできる場所が十分ではなかったことである。

それにより、女性たちがニーズを踏まえ、避難している女性の中から女性リーダーを選出し、女性の要望を取りまとめ、管理者に伝えられる体制づくりが必要だと考えられる。

③物資の不足

震災直後、全国から大量の物資が届けられたが、届いた物資と実際のニーズとにミスマ

ッチが起きたことも指摘された。一つには、女性の生理用品、乳幼児の用品など女性のニーズに配慮した備蓄がなかった、あるいは不足していたことである。もうひとつは、避難所だけでなく、在宅に避難した世帯への配布が遅くなったことである。それにより、男女別のニーズや要望は災害が起きてからではなく、在宅避難する世帯も含め、平常時から聞き取っておく仕組みが必要だと考えられる。

④心身の健康

仮設住宅の集会所でイベント・サロン活動を行い、ある程度コミュニティーがあるが、避難所における生活環境が酷いから、被災者の心身の健康に強い影響をしていた。特に、下着を干す場所がないためこまめに交換できなかった原因により、女性が特有な病気になったこともあった。

⑤固定的性別役割の強化

固定的な性別役割分担意識から、避難所での食事の準備などは女性が担当することになった。マニュアルなどや防災対策の取り組みにおいて、固定的性別役割分担意識の見直しへの配慮している割合が 37.9%、「配慮していない」と回答した割合が 45.4%となった。このような大きな負担とならないように、シフト制などのような支援の在り方なを課題が必要だと考えられる。

2、 復旧・復興期

復興計画に向け、家族・地域コミュニティでの関係に関する課題を取り上げた。一つは、避難所から仮設住宅、復興公営住宅に移転する時期における新たなコミュニティー形成するための支援である。例えば、男性向けにひきこもりや孤独死の防止などの支援活動である。もう一つは、女性や子供への DV に関する暴力問題である。

それにより、男女別ニーズに配慮し、男女共同参画の視点が復興計画に入れることが求めている。

3、 両方の時期

災害後のあらゆる時期を通じた課題は意思決定への女性参画と就労ということである。コミュニケーション能力の高い女性が、現場でのニーズをうまくくみ取ってコーディネートができたことを指摘した。それ以外、避難所の運営だけでなく、支援活動を行い、復興期にも大きな役割を果たしていた。

もう一つは、就労・収入のため、仮設住宅の集会所などにお茶会を行い、手芸品を作って販売することで収入を得る活動を注目された。また、女性への就労支援向けた起業セミナー、ビジネスなどの職業訓練などの例もあった。

3－2　宮城県石巻市の全体像

3－2－1　人口数の変化

1）　男女別人口の推移

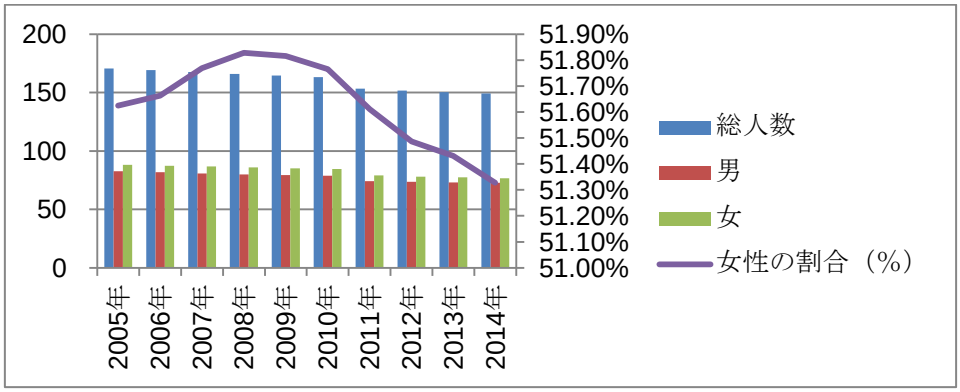


図３－２　　石巻市の人口推移（男女別）
※単位：千人
出典：2012 年から外国人住民は除く（資料：石巻市市民課掲載データをもとに作成）

2）人口動態の推移

表３－３　石巻市の人口動態の推移

年	自然動態			社会動態			人口増減（自然+社会）
	出生者数	死亡者数	自然増減	転入	転出	社会増減	
2009	1, 115	1, 834	△719	3, 583	4, 291	△708	△1, 427
2010	1, 100	1, 957	△857	3, 588	3, 972	△384	△1, 241
2011	994	5, 705	△4, 711	3, 586	9, 014	△5, 428	△10, 139
2012	1, 040	1, 781	△741	4, 755	4, 988	△233	△974
2013	1, 068	1, 688	△620	4, 441	4, 795	△354	△974
2014	976	1, 746	△770	4, 348	4, 670	△322	△1, 092

※2012 年から外国人住民も含め（資料：石巻市市民課掲載データをもとに作成）

震災前の石巻は、人口流出する地方都市でした。震災後、人口減少には、さらなる地域衰退の原因になった。

石巻市の男女別人口数の変化から見ると、石巻市に暮らしている女性数は男性より多いが、震災前石巻市人口数のうちに女性の比率は年より高くなったが、震災後女性の比率は減少していく。

3－2－2　男女共同参画について

男女共同参画の状況を把握するため、「社会全体における男女の地位の平等感」と「家庭生活に関する意識調査」の結果を考察していく。

1）男女平等意識

「社会全体における男女の地位の平等感」について、社会における男女の地位について回答数の半分以上が「男性の方が優遇されている」と考えているが、国勢調査の結果（図３－３）から見ると、2007 年から 2012 年まで、「男性の方が優遇されている」と考えている人が最も多いものの割合が低くなった。また、「平等」と考える人が、それぞれ 20.9%、23.2%、24.6%とポイントが増加していた。

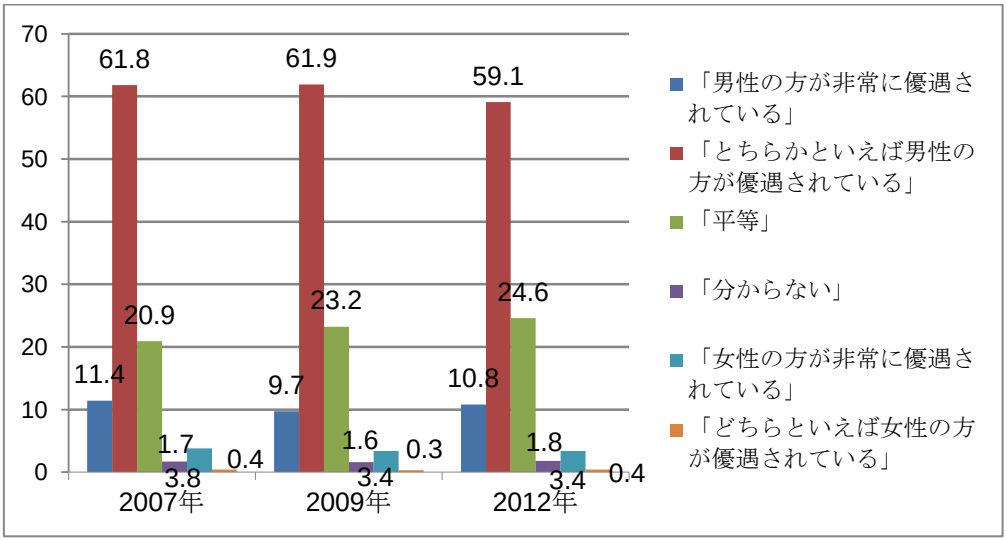


図３－３　国勢調査：男女平等意識に関する結果　（単位：%）

（資料：内閣府男女共同参画局のデータをもとに作成）

それに対し、石巻市で行った結果（図３－４）により、「男性の方が優遇されている」と考えている人の割合は、2006 年が 76.3%であり、2009 年が 62.6%であり、ポイントが減少傾向になった結果となった。2012 年は逆に 68.7%となり、前回調査の結果より高くなった。

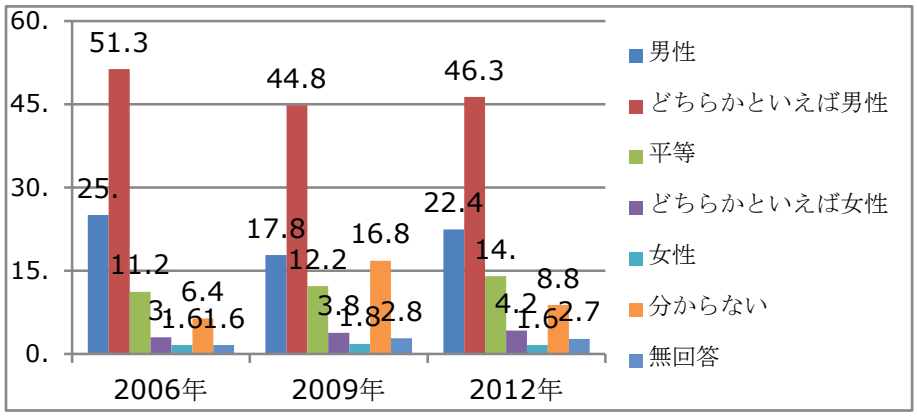


図３－４　石巻市における男女平等意識に関する調査結果　　（単位：%）

（資料：石巻市男女共同参画推進課掲載データをもとに作成）

2） 固定的性別役割分担意識

「家庭生活に関する意識調査」の項目の一つである固定的役割分担意識に関する質問「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである/男は仕事、女は家庭」に対し、国勢調査の結果と石巻で行った調査の結果を比較する。

国勢調査の結果から見ると（図３－５）、2007 年から 2012 年まで、「賛成」「どちらかといえば賛成」とする割合が低くなったが、2012 年に「賛成」「どちらかといえば賛成」のポイントが 51.6%となり、前回調査より上昇している。

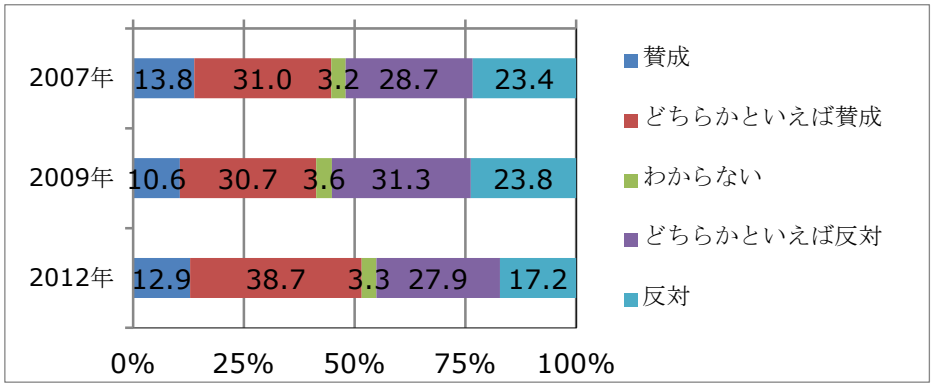


図３－５　国勢調査：「男は仕事、女は家庭」に関する結果　　（単位：%）

（資料：内閣府男女共同参画局のデータをもとに作成）

それに対し、石巻市で行った結果（図３－６）により、2006 年から 2012 年まで、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである/男は仕事、女は家庭」に対し、「賛成」「どちらかといえば賛成」の割合がそれぞれ 47.9%、44.3%、39.2%低くなった。

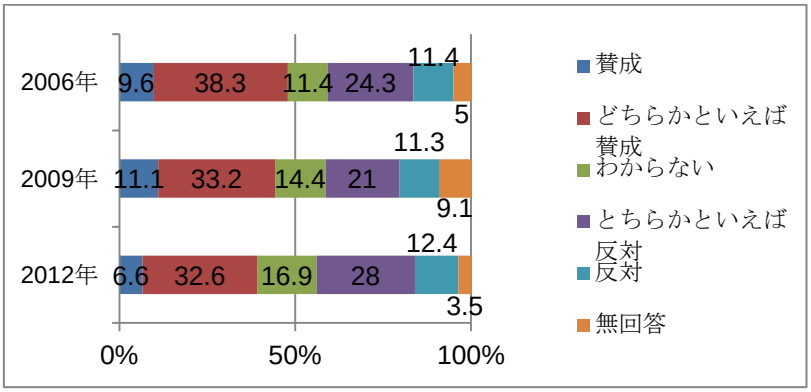


図３－６　石巻市：「男は仕事、女は家庭」に関する結果　　（単位：%）

（資料：石巻市男女共同参画推進課掲載データをもとに作成）

以上のように意識の変化の背景には、2011 年東日本大震災の発生から影響されたことではないかと考えられている。既に多くの先行文献が指摘されたことは、震災後、ジェンダーによる女性が固定的な性別役割分担が強化される傾向があるということである。

しかし、統計データの結果から見ると、ジェンダーに基づく固定的な性別役割分担意識は変わったが、被災地における復興過程に女性の労働負担が増加し、復興資源へのアクセスが女性に不利になる事を実証した。

3） DV相談について

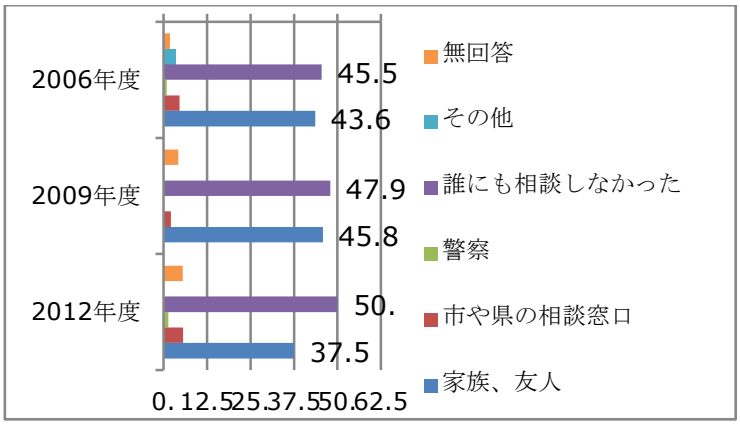


図３－７　石巻市に暮らしている女性が DV を受け、相談ルート

備考：①2006 年度男女別は統計してなかった ②2009 年度、2012 年度は男性の統計結果は除く

（資料：石巻市男女共同参画推進課掲載データをもとに作成）

石巻市で暮らしている女性のうちに、暴力による被害経験があった女性に対し、相談対象について、調査を行った。その結果により、DV 被害を受けた人が約 3、4 割の方は「家族、友人」に相談しているものの、「誰にも相談しなかった」の回答が約半数以上あるという結果になった。

震災後、DV 被害が増える傾向にあることは多くの調査から明らかにしたことである。そのため、女性への長期的なケア、また安心的な DV 相談の窓口の仕組みが円滑に進めていくように工夫しなければならないと考えられる。

第四章　活動組織のケーススタディ

第三章を踏まえると、震災直後、女性が速やかに自立支援を行う原因の一つは震災前から社会にあった不平等な事実ではないかと考えられる。震災後、女性に対して長期的な視点に立った支援の必要性を感じている。特に女性視点の反映、経済活動の再生、子育て女性たちが地域孤立しないような取り組みが必要だと考えられる。

そこで本章では、東日本大震災後、宮城県石巻地域で立ち上がった女性たちの活動から、女性が地域復興における果たす役割を明らかにすることを目的となる。

調査に関する概要は表４－１に示す。

表４－１　調査日付

	「やっぺす」	「ゆめハウス」		「ベビースマイル石巻」	
調査方法	ヒアリング調査	ヒアリング調査	インタビュー調査	インタビュー調査	参与調査
調査日付	2015.2.23	2015.2.24	2015.12.11	2014.8.23/ 2015.2.24	2015.9.16／ 2015.12.12
目的	震災後、子育て支援から支援対象や活動範囲拡大する原因、取り組みについて把握するため	震災後、仮設住宅に女性への支援から被災者の自立支援の取り組みについて把握するため	被災者の生活再建に向け、活動の様子、利用者の属性などについて把握するため	震災時、妊婦として親子居場所づくりを立ち上げた原因、震災による影響などについて把握するため	復興期における拠点としての役割、活動の様子、利用者の属性などについて把握するため

4－1「石巻復興支援ネットワーク」(「やっぺす」)について

4－1－1　活動の立ち上げとその後の経過

「石巻復興支援ネットワーク」（以下、「やっぺす」と記すことがある）は 2011 年５月から子育ての困難、女性の就労の難しさなどに対し、石巻の母親らが中心となって活動している団体である。

「石巻復興支援ネットワーク」が立ち上げられた前、2000 年 7 月から、子どもたちが環境教育が必要だと感じで、子どもが積極的に、社会的な活動を参加しているように「イッ

ツ・オアー・ネバー」という団体を設立した。2009 年 2 月に名称を「環境と子どもを考える会」として、子育て支援と子どもたちへの環境教育を中心に 10 年経って活動した。そのうちに、そもそも子供へ応援しているが、子育て女性にも支援を行なってきた。

2011 年東日本大震災があって、被災者を NPO とつないで支える合同プロジェクト（以下、つなプロ）の協力を得て、つなプロのメンバーと合同で「石巻復興支援ネットワーク」を立ち上げた。

その後、およそ 1800 世帯の被災者が暮らしている東北最大規模の仮設住宅団地になった石巻市開成・南境地区を中心に、周辺で住んでいた住民同士が互いに活動を始まった。

女性への支援について、関西のハンドメイドアクセサリーショップ SONRISA の協力を得て、子育て女性向けにハンドメイドアクセサリーブランド「Amanecer」販売サポートを行っている。また、起業家である女性たちのチャレンジを応援する「ママカフェ（Cafe butterfly)」も支援している。

その他、2013 年から、地元の人たちが中心になった市民参加型の地域づくりプログラムである「石巻に恋しちゃう」（以下「石恋」）も開催し始まる。（インタビュー記録全文は付録に付けた。）

4－1－2　調査報告

1） 位置

「石巻復興支援ネットワーク」の事務局は、JR 石巻駅から徒歩１分、石巻市役所の隣の「石巻駅前ビル」にある。



図４－１　「石巻復興支援ネットワーク」の場所　（出典：Google　Map）

2） 活動分野

東日本大震災後から、四つの分野のもとで支援活動を行っている。以下に示すように。

① 仮設住宅におけるコミュニティづくりへの支援

2011 年 6 月の後半ぐらいに石巻市における仮設住宅がたくさんある大橋地区の集会所を使って、仮設住宅における支援を始まった。それは、阪神・淡路大震災の時に仮設住宅から外へ出る機会がなく、関連死が出た教訓をもとにしたものである。

仮設住宅にいろいろな支援団体が入ってきたが、お茶会などを行ったが、住民たちが支援慣れた。したがって、ほとんど何もしない方々は大半だった。また、平日ボランティアはあまり入らなかったの状況で、「やっぺす隊がやってくる」という名前で仮設団地のコミュニティ形成支援を始まった。

仮設住宅の 11 団地の集会所や談話室で毎日順番に、仮設住宅に住んでいる住民向けにお茶会、マッサージ、手芸、フラワーアレンジメント、絵手紙教室などを開催し、周辺地域に住んでいる方も含め、支援を進んでいた。それに伴い、地域全員を巻き込まれた支援を行うのはお互いに仮設住宅におけるコミュニティ形成をしてきた。

具体的には、お茶会などでは男性の参加率がだんだん下がっていくため、2012 年２月から仮設住宅周辺で２か所の市民農園（『馬っこ農園』と『水貫農園』）の運営も始まった。地元の仮設住宅から歩ける場所に土地を借り、周辺に暮らしている農園経験のある方を講師の先生になり、仮設住宅の住民に教えて、一緒に農園を作った。このような農園という手法で、男性の参加率が高くなった。現在、仮設住宅から復興公営住宅への移転にとともに、農園の利用も継続している。

要するに、仮設住宅支援というのは集会所でのイベントを中心に、手仕事の提供および周辺地域を活用した農園から構成されていることである。



図４－２　仮設住宅の集会場におけす活動の様子（2011 年）　（出典：「やっぺす」HP）



図４－３　農園（左）と広場（右）の作業（2012 年）（出典：「やっぺす」HP）

②　子育て母親への就業支援

支援活動を進んでいくにとともに、自立支援ということはずっと声が高かった。そのた

め、子育て中で働くことが難しい母親および 50 歳以上で外で就職に付くのは厳しい女性への就労支援を始まった。

Ｔシャツや携帯クリーナーなどを作る内職仕事がどんどん減っていたため、2012 年 3 月から、ハンドメイドアクセサリーブランドである Amanecer（アマネセール）を立ち上げた。

女性への支援のあり方の一環として、内職の気持ちを維持できるような時給に支払い、また、内職のうちに商品を作るレベルが高かった女性がリーダーになり、講師とする講師料を別に払うことである。オリジナルブランドとして、年間利益は一千万ぐらい売り上げがある。現在（2015 年）では、4 人の子育て母親たちが Amanecer（アマネセール）の製作を担っている。



図４－４　子育て中の女性が働きている様子（2012 年）（出典：Amanecer「アマネセール」の HP）

また、2013 年 8 月から、地域から孤立しないように、石巻駅前で子育て中の母親が集まる居場所であり、女性たちのチャレンジを応援するママカフェ（Café butterfly）が運営始まった。運営の特徴として、カフェとして起業したい女性にも店長体験をすることができるし、子育て中の女性向けの講習会など様々なセミナーやイベントも実施している。また、ほかの団体との連携や女性の育成するプログラムにも行っている。



図４－５蜜蝋ハンドクリーム作り（左）と育児講座（右）（2016 年１月）（出典：「Cafe butterfly」HP）

③ 復興コーディネート事業

「やっぺす」では、企業や団体、学校など外部側による支援活動と現地のニーズをマッチング及び復興コーディネートを行っている。

2012 年 4 月、民間企業である積水ハウス（株）の新入社員による復興支援活動を始め、それ以降被災地での支援活動を希望する企業や NPO などが増加していく。

また、被災地の復興に地域住民が参画できるように、関西で若者を対象にする起業支援を行っている NPO 法人 edge と「コンソーシアム」を組み、社会起業家を支援する「やっぺす！起業支援ファンド」とインターンシップ「やっぺす！人材育成スクール」を実施した。このような外部からの支援活動を通じ、復興を支えるコミュニティが形成していくと考えられている。

その他、復興の担い手とする若者への教育も行った。2012 年 8 月、NPO 法人ブレーンヒューマニティーとの協働で、関西・東京より 31 名、東北より 10 名の学生が被災地におけるボランティアを行う「石巻復興ワークキャンプ」を参加した。これは、全四回を実施し、復興向けのつながりをつくり、継続的な関わりを見出すと目的である。その以外、学校のゼミ旅行、商品開発などの形で復興との繋がりを強化することもある。

2013 年から、女性人材育成について、化粧品ブランドランコムとの協働により、女性の自立を応援するスクールが始まった。震災後、女性の社会参画を推進し、まちづくりに女性の声を反映させていくように、「女性人材育成コース」および「女性起業家サポートコース」を行った。そのため、ビジネス基礎講習、メイクなどのビューティー講習、コミュニケーション講座など３期のプログラムを開催した。

④ 地域における担い手の育成

女性が社会に参画できやすい地域になるため、被災地の全員が復興に巻き込むにならないと考えていく。そのため、地域活性の手法である「オンパク」手法をベースに、岡山県の総社市で実施している「みちくさ小道」のノウハウ移転を受け、市民参加型の地域づくりプログラムである「石巻に恋しちゃった」（以下「石恋」）が 2013 年 2 月から立ち上げた。

それは、宮城県の石巻市、東松島市、女川町で一定の期間で小規模なイベントを行う、石巻市を中心に特技を持つ住民たちを発掘し、応援していく市民参加型の地域づくりプログラムである。特徴には、住み暮らす人が活動の主役にならないといけないことおよび誰でも出れるフィルドをつくるということである。もう一つは、無料ではなく、有料の形で仕事になっていくようなイベントを行うことである。それは、参加者も本音出して参加で

きるし、プログラムを開催する方にも自信を持っていくように目的となった。

地域を担う人材の育成を目的として、最初は石巻市内のコアの部分でイベントを行っているが、現在では全 7 回を実施し、148 名の達人による 313 のプログラムが生まれ、石巻・女川・東松島における約 5,800 名の方が参加した（2015 年 10 月現在)。(活動の内容は表４－２のように)

活動により、148 名の達人のうちに、「石恋」への参加がきっかけで起業される人もいるし、勉強しに行って、資格を取ったから先生として活動している人もいる。例えば、お菓子作りの達人が石巻の立町復興ふれあい商店街でお菓子の販売で起業され、仮設住宅や親子・子供向けにお菓子作り教室も進めている。(図４－７)

それにより、地域におけるコミュニティの繋がりも強化した。

表４－２　「石恋」の活動歴

時間	テーマ	開催エリア	プログラムを開催する人（人）	プログラム数（個）	参加者数（人）	満足度（%）
第１回 (2013/2/1～2/17)		石巻市	26	25	497	
第２回 (2013/7/12～8/11)	「夏遊び」	石巻市、東松島市、女川町	44	44 (天気原因により２プログラムが中止)	1,529	98.8
第３回 (2013/11/2～11/4)	「交流」	石巻市、東松島市、女川町	29	23 (参加者が無く１プログラム開催できない)	858	98.5
第４回 (2014/2/2～2/23)	「冬恋」	石巻市、東松島市、女川町	48	43 (参加者が無く１プログラム開催できない)	549	97.5
第５回 (2014/7/19～8/24)	「まちびらき」	石巻市、東松島市、女川町	70	62 (天気原因と参加者が無く３プログラム開催できない)	744	97.3
第６回 (2015/3/14～3/29)	「バージョンアップ」	石巻市、東松島市、女川町	51	47	626	97.1
第７回 (2015/8/17～9/13)	「からやぶり」	石巻市、東松島市、女川町	78	69	1023	97.4



図４－６　第１回「石恋」活動スケジュール　（出典：「石恋」ガイドブック）（2013 年）



図４－７「石恋」の参加をきっかけで起業した説田さんのお菓子工房　「Chez Setta」）（2015 年２月）

4－1－3　考察

「やっぺす」は、仮設団地のコミュニティ形成支援を始めった最初、支援者としてイベントを提供するという形でした。住民の方と話し合いを進めていたとともに、単なるイベントではなく、住民の方に寄り添い、一緒に作ることを通じ、コミュニティを形成してい

くことができた。また、「石恋」のように地域全体を巻き込まれ、地元の団体同士が協力しあっていくことは、石巻の復興に対し不可欠なことである。

そのため、仮設住宅への支援から子育て中の母親たちが孤立しやすいである社会課題を着目し、積極的に活動する女性の社会参画を推進し、まちづくりに女性の声を反映させるようにサポートしていくことは明らかにした。そのうちに、コミュニティ形成が自立を促すことに役立っていることにより、力をつけた女性のエンパワーメントをどう活かすのかも重要になると考えている。

4－2　一般社団法人コミュニティスペースうみねこ(「ゆめハウス」)について

4－2－1 活動の立ち上げとその後の経過

一般社団法人コミュニティスペースうみねこ（以下「ゆめハウス」）は震災後に被災者雇用促進となって活動しているグループである。

2011 年 4 月から避難所で赤ちゃんや幼児を抱えた母親たちに子供の面倒を代わりに見るといった「ママサポーターズ」を立ち上げた。それと並行した高齢者に対するデイサービスも行っていた。

2011 年 7 月下旬から仮設住宅への住居に伴い、牡鹿郡女川町における高白浜仮設住宅内に布草履づくりといった就労サポートが始まった。それは、津波と地盤沈下の被害により、主要産業の水産業が続けにくい女川町を復興させるため、仮設住宅に住む母親が集まり、T シャツを素材とした「布草履」を作ることである。2012 年までは 3 箇所の仮設集会所と「うみねこハウス」をあわせて全部で 4 箇所における 60 名程度で参加していた。そのうちに、50～80 歳代の女性が 50～60 名にいる。「ママサボーターズ」には、商品の質に関わらず、やる気を出せるように参加された方に 1 足 1000 円を支払いた。それ以外は、活動費から出し、参加された方が温泉旅行なども行った。

また、「うみねこハウス」で「さんまなたい焼き」作りには女性はたくさん参加したが、男性があまり来ないということで、2012 年秋から、被災して職を失った男性に対し、津波で多くの家屋が流された女川町高白浜に果樹園を作るプロジェクトを開始した。果樹園を作ることで、高齢者を中心の男性たちが雑草とり、防獣ネットの整備などを通し、被災者の生きがいの形成および自立を促すことができる。

2014 年 4 月から、女川町高白浜に唯一残った建物（果樹園横の倉庫）をコミュニティカフェに改装し、「ゆめハウス」というプロジェクトが立ち上げた。カフェの運営には、飲食の提供以外は、被災者の自立活動はもちろん、子育てや子供の学習支援なども活動を行

っている。

現在は果樹園づくり、日替わり定食の提供を行うことにより、女川町における被災者の自立が事業の中心であり、被災地のコミュニティづくりを目指した支援活動なども続けている。(インタビュー記録全文は付録に付けた。)

4−2−2　調査報告

1) 位置

「ゆめハウス」の場所は、女川町高白浜字高白 25-2 であり、女川駅から車で約８分のところにある。



図４－８　「ゆめハウス」の場所　(出典：Google　Map)

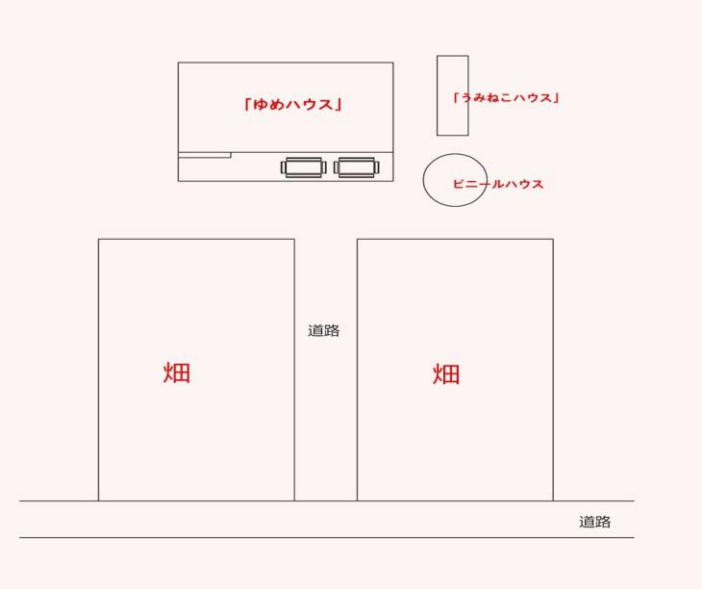


図４－９　「ゆめハウス」の場所図面

東日本大震災の当時は２階の 1.5m ぐらいまで津波が到着し、2013 年 10 月から唯一残った建物（倉庫）として、ボランティアや一部プロの方に協力を得て再生させ、2014 年４月からコミュニティカフェとして運営をしている。



図４－10「ゆめハウス」改造前　白い２階建ての倉庫（左）（2013 年 10 月）（出典：「ready for」ブログ）

「ゆめハウス」改造後　２階建てのカフェの外観（右）（2015 年 12 月）

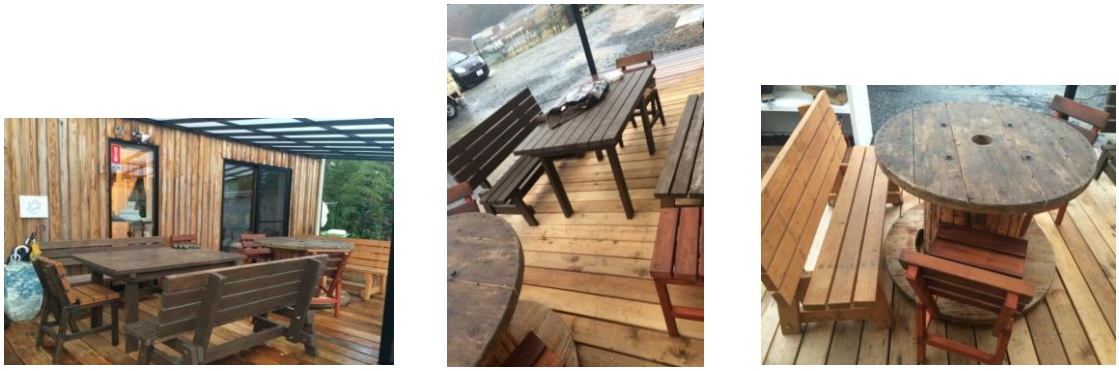


図４－11　「ゆめハウス」玄関外の様子　（撮影時間：2015 年 12 月）



図４－12　「さんまなたい焼き」使った「うみねこハウス」（左）

工具などを預かるビニールハウス（右）　（撮影時間：2015 年 12 月）



図４－13　農園の様子　　（撮影時間：2015 年 12 月）



図４－13　植えた唐辛子（左）、「さんまなたい焼き」の販売車（右）　　（撮影時間：2015 年 12 月）

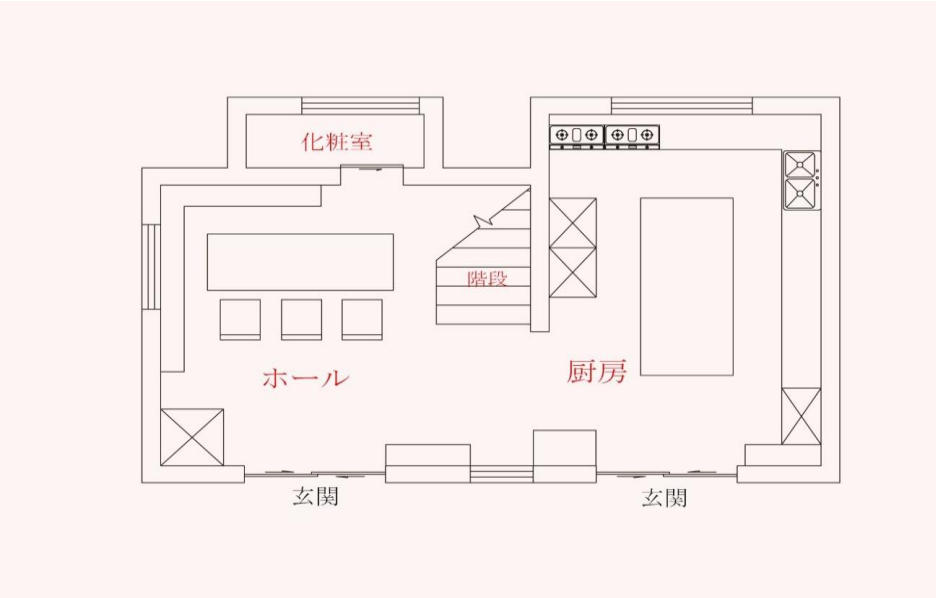


図４－14　「ゆめハウス」１階部屋図面



（1 階のホール）



（商品の陳列）













図４－15　キッチン環境、設備　（撮影時間：2015 年 12 月）

2） 活動状況

① 商品の販売について

販売している商品である布草履、鍋敷きは全国から配送して来た使い古しのＴシャツを利用し、かぎ針で編み上げたオリジナルものである。男性は震災前漁師として長年働いてきた経験を生かし、網を使ったストラップを作っている。女性たちは T シャツを細く切って、紐状にした後、太い編み棒で編んでいく布草履を作っている。（図４－16）



（ゆめ玉ストラップ）



（布草履）





（Ｔシャツを利用して作った布草履、鍋敷き）（出典：「ゆめハウス」HP）

図４－１６　販売している商品





図 4－17　仕事中のおじいさんたち、おばあさんたち　（出典：「ゆめハウス」HP）

男性 3 人で『Papachans』というチームを構成し、震災前から地元の食材として使ったイチジク、またニンニク、唐辛子などを育てている。そのうち、津波で船を流されてしまい、生業を失っていた 70 代の元漁師も畑仕事にしている。植えたニンニクや唐辛子は、若い人が加工して木造製品に飾りして販売している。



図４－18　販売している唐辛子単品（左）3 個セット箱入り（右）（出典：「ゆめハウス」HP）

石巻で被災し、現在も仮設住宅に住んでいる 20 代の男性が「ゆめハウス」で家具（唐辛子の箱など）を作っている。



図 4－19　木造箱　（出典：「ゆめハウス」HP）

② 日替わりランチの提供について

毎日（木曜定休）11：00～15：00 まで営業しているカフェは、日替わりランチを提供している。料理は、60 代から 80 代までの女性 13 人が、「A子ちゃん」、「B子ちゃん」、「C子ちゃん」というグループ名で 3 組に分かれ担当している。

「A子ちゃん」チームは女川町に暮らしている女性たちである。担当している日にちは週に 4 回（月曜日、水曜日、土曜日、日曜日）である。

平均年齢 80 歳の「B 子ちゃん」チームは仮設住宅に住んでいる女性たちである。担当している日にちは週に 1 回（火曜日）である。ランチの食材には、漁師の息子さんが捕ってきた女川の魚を使った煮物が多かい。

石巻市に住んでいる「C 子ちゃん」チームは金曜日の担当スッタフとして、野菜などヘルシーなものが多い。







図４－20　ランチの種類　（写真：「ゆめハウス」HP）




（2015 年 2 月「B 子ちゃん」チームが作った料理）（2015 年 12 月「C 子ちゃん」チームが作った料理）

3） 参与調査

調査日：2015 年 12 月 11 日　9：00～15：00

「ゆめハウス」の運営は 11 時から始まるが、スタッフたちは 9：00 から準備し始ま

る。

30 代の女性が掃除機で掃除し、若い男性二人が工事をやっている。厨房に食事の準備をしている３人のおばあさんたちは毎週金曜日担当しているし、石巻に住んでいる女性である。（図４－２１）




図４－21「C子ちゃん」チームと筆者　　（「C子ちゃん」チームが働いている様子）

人参、豚挽肉、干し柿、ミニトマト、サニーレタス、ブロッコリーなどの食材はスーパーで買ったものである。女川の魚や地物野菜、また「ゆめハウス」の農園で植えたイチジク、小松菜、じゃが芋などを含め、グループにより個性があるメニューは毎回グループで相談した上で決められているそうである。







図４－２２　働く様子：味付けなど相談しながらテキパキと料理を作っている）



図４－２３　出来上がった料理

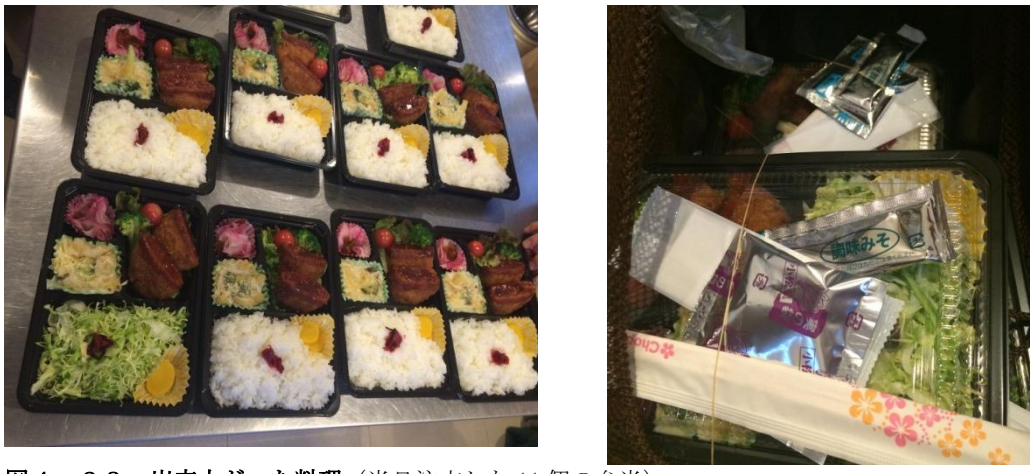


図４－２３　出来上がった料理（当日注文した 11 個の弁当）

４）参加者状況

現在、被災者でありつつ、20 名程度でスタッフとして、運営を担当している。そのうちに、男性５人であり、20 代２名、30 代１名、70 代１名である。女性 15 人であり、30 代２名、50 代１名、60 代３名、70 代７名、80 代２名である。

「ゆめハウス」活動者の状況を把握するため、以下の質問項目を用いて 20 名のスタッフのうちに 6 名にインタビュー調査を実施した。

①調査票内容

問１　あなたの性別、年齢をおたずねします。当てはまるとことに○をつけてください。

１）性別：１、男性　　２、女性

２）年齢：①２０歳代　②３０歳代　③４０歳代　④５０歳代　⑤６０歳代　⑥70 歳以上　⑦80 歳以上

問２　東日本大震災前後の職業とお住まい状況について、おたずねします。当てはまることに○をつけてください。

１）震災前の職業：①農林・水産業　②専門主婦　③自由業　④正社員・正職員　⑤パート・アルバイト　⑥その他（　　）

２）震災時のお住まいは、どんな住宅ですか？

①木造住宅　　②非木造住宅（鉄骨造、コンクリート造）　③その他（　　）

３）震災の被害はどのようなものでしたか？お答えになれることだけで結構ですので、以下にお書き下さい。

①全壊　②半壊　③一部破損　　④浸水　　⑤その他（　　）

４）どこの仮設住宅を利用しましたか？

①高白浜仮設住宅　　②蛇田中央仮設住宅　③針浜仮設住宅　④小乗仮設住宅　⑤横浦仮設住宅　⑥桐ケ崎仮設住宅　⑦清水仮設住宅　⑧その他（　　）

５）現在どこに住んでいますか。

①仮設住宅　②公営住宅　③自宅再建　④その他（　）

６）現在のお住まい状況について

①一人暮らし　②夫婦二人　③子供連れ　④　⑤その他（　　）

問３「夢ハウス」における仕事について、おたずねします。

１）「夢ハウス」に参加されたのは、いつ頃ですか？

①2011 年（　）月　　②2012 年（　）月　　③2013 年（　）月　　④2014 年（　）月　⑤2015 年（　）月

２）「夢ハウス」に参加するきっかけについて。(複数可)

①収入のため　②生きがいのため　③自分の技術を活かせるため　④友たちの紹介のため　⑤集まる場が欲しいのため　⑥その他（　　）

３）家から「ゆめハウス」に通勤手段について

①徒歩　　②自転車　　③車　　④その他（　　）

４）家から「ゆめハウス」に片道何分かかりますか。

①10 分未満　②20 分未満　③30 分未満　④40 分ま未満　⑤50 分未満　⑥一時間未満　⑦一時間以上

５）週担当何日ですか。

①週１回　②週２回　③週３回　④週４回　⑤週５回　⑥週６回　⑦不定期（　　）

６）一日の仕事時間はどのくらいですか。

①3 時間未満　　②5 時間未満　　③5～7 時間　　④不定期（　　）

７）担当している仕事について。（複数可）

①食事　　②手仕事（ゆめ玉ストラップ・布草履・なべしき・コースターなど）

③畑仕事　　④その他（　　）

問４　「ゆめハウス」での活動において、役に立っていると感じる人生や仕事の経験について教えて下さい。

問５　「夢ハウス」の活動において、女性/男性としてのどのような特性が生きると感じていますか。

その結果を以下のように説明する。（表４－３）

表４－３　「ゆめハウス」参加者へのインタビュー結果

対象		NO.1	NO. 2	NO. 3	NO. 4	NO. 5	NO. 6
性別		男性	女性				
年代別		20 代	30 代	30 代	60 代	60 代	70 代以上
東日本大震災時の状況	職業	正社員	専門主婦	専門主婦	パート・アルバイト	専門主婦	専門主婦
	住宅類型	非木造住宅	木造住宅	木造住宅	木造住宅	木造住宅	木造住宅
	被害状況	全壊	一部破損	一部破損	全壊	全壊	全壊
	仮設住宅利用しているか	蛇田中央仮設住宅	自宅	自宅	蛇田中央仮設住宅	蛇田中央仮設住宅	蛇田中央仮設住宅
現在の住まい状況	住まい状況	仮設住宅	自宅	自宅	仮設住宅	仮設住宅	仮設住宅
	同居状況	子供連れ	子供連れ	子供連れ	子供連れ	夫婦二人	一人暮らし
「ゆめハウス」に関して	通勤手段	車					
	通勤時間	30～40 分	30～40 分	一時間以上	30～40 分	30～40 分	30 ～ 40 分
	参加する時間	2014 年 6 月	2014 年 12 月	2015 年 9 月	2012 年 3 月	2012 年 3 月	2012 年 10 月

	参加するきっかけ	自分の技術を活かせるため	収入のため； その他（人柄がみんな素敵だから）	その他（八木さんからの紹介）	集まる場所が欲しいのため	自分の技術を活かせるため； 集まる場所が欲しいのため	自分の技術を活かせるため
	担当している仕事	手仕事、事務・物作り	カフェの補助や雑務	カフェの補助や雑務	食事、手仕事	食事、手仕事	食事、手仕事
	担当日にち	週に５回	週に４回	週に４回	週に１回	週に１回	週に１回
	仕事時間	５～７時間	５～７時間	５～７時間	５～７時間	５～７時間	3～5 時間
活動において、役に立っている仕事の経験について	1. 家具製作をしていた経験が物作りに生きている。 2. 接客業を以前していたので、お客様に対して自然に対応できるようになっていると思う。 3. たくさんの人と会える、そして仲間が増えたこと。 4. 食事作りで、いろいろな料理の作り方とか、経験出来てよかった。 5. 自分の持っていない技術を知ることができる、また習得できることがよいと思う。						
活動において、男性/女性としてのどのような特性が生きると感じているか	1. 女性は布製品の製作、食事作り；男性は、畑や物作りなどの手仕事を生かしている。それぞれ自分たちの役割があって、今までの仕事の経験、家庭での日常の生活が「ゆめハウス」に生きている。 2. 男性も女性も細かい作業をして自分の収入を得たり、人と人との繋がりを大事に皆しているので、全国からお母さん、お父さんに会いにきてくれるのだと思う。 3. 女性特有の仕事もあり、女性にはちょっと無理なことはやっぱり男性でなければならないこともあるなぁと感じることもありますので、男女いて良いのではないでようか。 4. 男性、女性関係なく、働いている人たちみんながいきいきとしていて、笑顔がたえないことが素敵だと思う。それぞれ分担する仕事が違い、それぞれに良さを出しあっているので、お互いに助け合うことができると思う。						

「ゆめハウス」の参加者の属性にかんする「震災前の職業」には、正社員、専門主婦、パート・アルバイトである。また、「住まい状況」には、震災後仮設住宅を利用し、現在も仮設住宅に暮らしている方もいるし、震災により一部破損した自宅に暮らしている方もいる。

「ゆめハウス」に「参加する時間」および「現在担当している仕事内容」の結果から見ると、2012 年から参加された方は、50 代以上の女性 3 名である。それは、仮設住宅における「女川高白浜草履組合・ママサポーターズ」のきっかけで、「ゆめハウス」に参加し続けていることである。現在では、カフェの食事を担当しているし、仮設住宅におけるやっている草履などの手仕事も続けている。2014 年から参加された若い世代は、主に「ゆめ

ハウス」の商品販売およそ雑務などを担っている。それも、被災者自分の特技が生かせるようなものを作ることであり、子育て中の女性が地域から孤立しないようなものである。例えば、20 代の男性は家具製作をしていた経験を生かし、箱などの物作りをやっている。

「参加するきっかけ」について、「自分の技術を活かせるため」と答えた方が 3 名、「集まる場所が欲しいのため」と答えた方が２名、「収入のため」と答えた方が１名であった。「その他」と自由に書いた方には、友人の紹介、また集まれる場所で皆と楽しみながら仕事をしていることで「ゆめハウス」を参加された方は各１名であった。

問４「『ゆめハウス』での活動において、役に立っている仕事の経験について」の設問からは、震災前から得た経験を活かし、持っていない技術を「ゆめハウス」の活動から習得できると記述されている。

問５「『ゆめハウス』の活動において、男性/女性としての特性をどのように生きていますか」の設問からは、男女別仕事を分担し、仕事の経験、家庭での日常生活の知識を活かし、それぞれの役割を担っていることを明らかにした。

4－2－3 考察

地域コミュニティが生活再建・復興につながっているから、住民同士の触れ合いを互いに助け合えるように、人と人とのつながりをつくり続けることが大切である。

高齢者である男性たちの畑と果樹園作りには、漁師の経験を生かした上で編み物と防獣ネットなどをしていることである。また、高齢者である女性たちが仮設住宅における布草履作りおよびカフェの食事をしているのも日頃から家事の役割をやっていることである。

要するに、「ゆめハウス」は女性の視点を活かした手編みなどの生業の再生、および高齢者の男性が作業しやすい果樹園づくりを通し、被災地における人と人をの繋がりが強くなった。そのきっかけで飲食の提供であるカフェの運営も始まった。

震災後、地域衰退の原因になった若者の人口流出ということで、多世代の人が集える居場所作りが始まる。それにより、20～40 代の子育て中の女性たちもカフェの運営に巻き込める取り組みが立ち上げている。

4－3 「ベビースマイル石巻」について

4－3－1 活動の立ち上げとその後の経過

特定非営利活動法人「ベビースマイル石巻」は震災後、妊婦から未就園児の親子に対し、子育て活動を行う団体である。

震災時、自宅に避難した子育て世帯への物資配布や情報不足を感じ、また震災前から地域で子育てサークルは震災により継続難しく解散したため、母親が集まれる場所が差し迫った。そういうきっかけで、つながりを強化することで、2011 年５月、居場所づくりを始めった。

情報発信の重要性が感じ、ネットでホームページを作ったことにより、繋がりが強くなった。参加された方のうちに避難所から乳幼児を抱えている女性もいるし、子どもの夜泣きは周囲への迷惑を考え、避難所から出て行った家族も多かった。

6 月から蛇田地区の生協を利用し、イベントを開催しながら、支援物資の配布を続いた。子供連れの母親だけではなく、ボランティアなども参加できるように、12 月から、蛇田地区の仮設住宅の集会所を利用し、「お産と子育てにつよいまちづくり」が立ち上げた。しかし、仮設に住んでいる方が仮設住宅の集会所ではなく、ちょっと離れた場所での居場所に参加していくことで各場所を借り、いろいろなイベントを続けている。

2012 年から震災で失われた子供の遊び場の提供、および震災のケアなどのサークル活動を通し、コミュニティを形成していくことを目的とし、活動を行ってきた。内陸である蛇田地区では、震災前から子育て施設が少なく、また海から遠いから、「ベビースマイル石巻」は蛇田地区に移転し、居場所づくりを続けている。このようなネットワークで育っていた居場所づくりから、参加者の母親も安心感が出てきて、女性のパワーをアップしてきた。

また、東日本大震災での石巻の妊婦さんの体験などを伝え、乳幼児・妊婦を支援するため「こどもたちへ　ママたちがいま、伝えたいこと」というシンポジウムを開催し、平常時から子育て中の母親たちを対象にサロンや相談窓口をたくさん開き、支援活動を行っている。(インタビュー記録全文は付録に付けた。)

4－3－2　調査報告

1) 位置

「ベビースマイル石巻」は三つの拠点として子育て支援を行っている。石巻市蛇田字新下沼にある「みんなのひろば」、開成団地の集会所の中にある子育てコミュニティカフェ『ボンボンカフェ』、また蛇田字土和田にあるマタニティ・子育てひろば「スマイル」である。



図 4－２４　「ベビースマイル石巻」の場所　（出典：Google　Map）

2） 活動状況

子育て中の女性が地域から孤立することを避けるように、地域と繋がることは重要である。

一つとしては、震災時の情報発信である。「ベビースマイル石巻」は、自宅で避難生活をしていった女性たち、特に妊娠・子育て中の母親たちが社会から孤立することを防ぐよう、親子の居場所を確保するように活動を始めた。きっかけになった要因の一つは、震災直後、物資の配布である。その後、毎月 10 回～15 回イベントサロンを開催し、参加者は 1 か月当たり 200 人を数える。イベントサロンには石巻市中心部だけではなく、東松島、蛇田地区なども含めて、行政や助産師との協働によるたまひよサロン（母親教室）、親子ビクス、リトミック、ベビーマッサージなど行っている。　（図 4－23）

情報発信の手段として、ブログ、雑誌の発信、またメーリングリストなどとういう形の媒体も利用している。「ベビースマイル石巻」に参加された方は、イベントのスケジュールをみんなさんが登録したメールアドレスに送信している。現在（2015 年 2 月まで）では、メールを登録した方は約 700 人である。

もうひとつは、転々として活動をやることより、地域にねざす拠点が必要である。震災後、石巻市における子育て支援を行っている団体が増えったが、不可欠な視点はある。というのは、居場所づくりには、親子が集まれる居場所だけでなく、地域の情報発信できる場所になることである。子育て居場所は、震災時、母子の避難所あるいは母子の談話室の情報発信できる場所として仕組みを立ち上げていく。それは、震災時立ち上げた団体の特

徴の一つとして、震災の教訓を伝え、親子で防災を考えることである。

そのため、「ベビースマイル石巻」が取り上げた活動には、サロンとイベント以外は、震災時に関する文集、また子育て情報誌などの冊子も行っている。（図４－24）





（3Ｂ体操と料理教室）（出典：「ベビースマイル石巻」ブログ）



（0 歳講座）　（出典：「ベビースマイル石巻」ブログ）

図４－２５　活動様子





図４－26 文集・冊子の発行：石巻市の子育て情報（左）、3.11 震災時の記録文集（右）

4−3−3　考察

震災後、子育て支援活動を行ったとともに、乳幼児の用品など女性のニーズに応じた支援物資が 2011 年 3 月に届いたけど、受け取ったのは遅くなったことで、配布システムは不十分だったということを明らかにした。また、避難所や仮設住宅ではなく、在宅にいる被災者に支援が十分に届かず、物資の不足、生活不安等へのケアなどのニーズが把握できなかったことは、在宅避難の世代への情報発信が少なかったではないか。それにより、男女別からのニーズは災害が起きてからではなく、平常時から聞き取っておくことが必要であり、そのような仕組みが必要である。

また、防災意識について、女性の視点で備蓄品の準備が大事であるが、男性も含め、子育ての役割を担うことを求めていることである。子育ての役割を担っている女性のネットワークにも男性と連携できるように、仕組みが立ち上げていく。

そのため、震災前から人口流出する地方都市とする石巻市が少子高齢化社会を迎え、子育てサークルなどいろいろな地域ネットワークを活用して、防災の取組を重視し、緊急時に活かせるような行政・地域社会とのネットワークが必要だと考えられる。

4−4　まとめ

以上の三つの団体を中心に現地調査、インタビュー調査を行った。以下、表４－４に示した団体の活動のまとめを参考した上で、事例の共通点と特徴点に分けて考察していく。

表４－４　三つ事例の活動プロセス時間軸

時間／団体	やっぺす	夢のハウス	ベビースマイル
2011 年			
3 月～5 月	３月、被災者を NPO とつないで支える合同プロジェクトの活動のサポート開始。 ５月、「石巻復興支援ネットワーク」として活動開始。	４月、避難所で子守「ママサポーターズ」成立。 ５月、高齢者へのデイサービス開始	５月、任意団体としてスタート。 居場所づくり、支援物資の受け入れ配布
8 月	仮設住宅団地のコミュニティー形成支援活動開始	高白浜仮設での布草履づくり開始	各場所を借り、子育て活動始まる
2012 年			

2月～6月	２月、仮設住宅周辺での市民農園の運営を開始。 ３月、石巻の子育て女性により「Amanecer」販売開始。 ４月、地域社会雇用創造事業実施。	6 月、「うみねこハウス」オーペン	３月、震災文集発行。 ４月、NPO 法人格取得。妊婦～未就園児へのサロン始まる
8月～11 月	8 月、地域がひとつになった「東日本大震災盆供養祭・追善盆踊り御霊祭」開催。 宮城県と関西の大学生による復興支援活動実施	11 月、果樹園を作るプロジェクト立ち上げった。	８月、子育て情報誌作成。 １１月、子育てビックイベント「つながる子育て」開催
2013 年			
2月～４月	２月、「石恋」開催。	3 月、高白浜での果樹園づくり開始	３月、子育てリソースマップ発行。 ４月、妊婦・子育てコミュニティカフェ開始
８月～11 月	８月、ママたちのチャレンジを応援するカフェ「CAFE BUTTERFLY」が開店 ９月、NP プログラム開始	９月、「ゆめハウス」プロジェクト開始	11 月、「東日本大震災復興支援事業リフレッシュママクラス開催
2014 年			
4月～７月	各イベント・プロジェクト続ける	4 月、夢ハウスづくりオープン	６月、子育てビックイベント「ベビスマ子育てフェスタ 2014」開催

4－4－1　個別の特徴

個別の特徴として、次のことを明らかに言える。

1）「やっぺす」：

震災後、良いまちづくりを進めていく上で、ほかの組織・団体との連携・協力があったが、地域の方々が主体となって動いていることを明らかにした。また、イベントは有料だが、子育て世代の女性がイベントに参加しやすくなるように、無料の託児ボランティアの体制が実施された。

２）「夢ハウス」：

震災直後、保育士の経験から子育て中の女性の辛さを感じ、避難所で幼い子を持つ親の子守の支援活動を行った。学校が始まるにとともに、支援に頼ることではなく、外で働くことが難しい高齢者の自立支援へ仕組みが立ち上がった。支援物資として届いた古着を利用し、布草履作りが始まり、仮設住宅で 50 代から 80 代までの女性たちが参加した。内職だけでなく、温泉旅行などのような活動も行った。それにより、被災者の生活再建における地域で人と人のつながりが強くなった。

復興に向け、高齢者の参加に進んでいくとともに、子育て母親への支援活動に着目していた。それは、子育て中の母親が安心して働けるように居場所づくりの整備である。

３）「ベビースマイル」：

避難所に行けなく子育て家庭には、生活不安などの状況から情報の発信、また支援物資の配布を始まった。活動の仕組みには、震災前の活動をある程度受け継い、新しい取り組みも立ち上げた。例えば、「親子ビクス」というのは、震災前地元でやっていたものであるが、震災により継続出来なくなった。そのため、平日からのつながりを継続するように、活動を複活させた。

また、子育て支援の対象は０歳から４歳くらいの子供がメインである。そのため、活動を行った上で、参加者の状況変化を気ついた。現在参加された母親たちは震災時子供連れなかったということで、震災に対する防災意識が低い。危機感が後輩の母親たちに受け継ぐように、「０歳児の講座」などから、被災地の母親たちが体験したことおよび石巻市子育ての現状と今後の課題を伝える仕組みが立ち上がった。

4－4－2　三つの事例からの考察

三つの事例に共通した要点は以下のように説明する。

１）活動が立ち上がったきっかけについて、目の前のニーズを捉え、主体的に行動していたことである。

２）被災された方だけで活動を行わず、地域の方々と一緒に支えあい活動していたことである。

３）活動の仕組みについて、男女差を感じ、男女別に対する支援活動を行うこと。

４）被災者の参加理由から見ると、自分が持っている技術と経験を活かすことである。

５）子育て支援について、子育て世代の実態から親子が交流できる居場所の必要性が感

じ、居場所づくりを提供していることだけでなく、いろいろな取り組みの変化がある。

表４－５　考察要点の例

要点	「やっぺす」	「ゆめハウス」	「ベビースマイル石巻」
1）	被災者を NPO とつないで支える合同プロジェクトの協力を得て、活動開始。	2011 年４月避難所で子育て支援を行ったが、学校の開始に従って、５月から生活再建が難しい高齢者に対する支援を行い、同年８月仮設住宅で仕事から新たなコミュニティーを形成していくことである。	在宅避難した世帯への支援品配布、情報発信が開始。
2）	仮設住宅で暮らしている住民だけでなく、周辺で住んでいる住民も巻き込んで、農園などを運営していくこと仕組みが立ち上がった。それにより、住まい環境の変化から新たなコミュニティに適応していくことが実現できると考えている。	高齢者だけではく、若い世代が参加できるように、仕組みが取り上げた。	親子ビクスなどは震災前から地元でやっていたものが、震災により継続出来なくなったため、平日からのつながりを継続し、活動を複活させた。
3）	仮設住宅における行った活動の参加状況から、男性の参加率が低いことにより、女性がお茶会などを続け、男性の参加者を増やすことができる農園運営などを両立していく。	女性が中心となった布草履製作活動以外は、男性も参加できる果樹園づくりを始まった。	室内の活動だけでなく、男性が参加しやすい室外活動を行い、父親たちが子育ての役割を担うことを求めている。
4）	自分の趣味や技術を活かし、「石恋」の活動を参加した。また、そのきかっけで起業した。	・男性は元漁師であり、果樹園で樹木の世話をしている。自分の特技が生かせるように、防鳥ネットの整備、農園作業の日記記録などをやった。 ・一人で暮らしている高齢者の女性は、自分の生きがい作りに向け、食事の担当として参加している。	３名の母親が「ベビースマイル石巻」に参加することをきかっけで、マタニティ・子育てひろば「スマイル」のスタッフとして働きている。
5）	子育て役割を担っている女性たちの就労の難しさから、起業支援を行っている。	子育て世代の参加を求めっている。子育て中の女性が参加するように、高齢者が子供の面倒を見る。	物資の受付から繋がりが築くことから、イベントなどを通し情報発信すること、また男性を巻き込むことを求めている。

第5章　被災地において子育て支援活動の実態調査

第４章では現地事例調査により、女性向けの支援活動は子育てサポートから支援を始めていく団体が多いと言える。少子高齢化にとともに、子育て世代が今後の石巻市の復興に向け大きな担い手やリーダーになっていく。そのため、子育てしやすい環境・地域まちづくりが不可欠であることは言うまでもない。

女性たちが震災後から復興における役割を担うことは明らかにしたが、震災時立ち上げた子育て支援を行う団体は取り組みをどういうふうに変えていくのか、本章で考察する。

5－1　「ベビースマイル石巻」活動経緯について

5－1－1　年代別の変化

「ベビースマイル石巻」は、東日本大震災のきっかけで妊婦と未就園児親子に対する子育て居場所づくりを始めた。

震災直後に必要な物資や情報が届かなかったことに関して、妊婦や乳幼児をもつ家庭が地域から孤立していることと述べている。というのは、ただでさえ出産は環境が大きく変わって孤立する時期であり、震災前から子育て向けの居場所が少ない。

また、震災により、移住することで孤立したり、震災でコミュニティが崩壊したことはある。地域から子育て中の孤立をなくすため、イベントやサロンを通し、居場所およびネットワークづくりを形成していくことは重要である。

表 5-1　「ベビースマイル石巻」活動歴

年月	活動	内容
2011 年		
3 月 11 日　東日本大震災		
5 月 （仮設住宅の入居開始）	任意団体としてスタート	婦から未就園児親子の居場所づくり支援物資の受け入れ配布始め
6 月～7 月	生協蛇田店集会室　イベント	イベントを参加される方へ支援物資配布続いた
8 月～9 月	親子ビクス	日本財団の助成により参加費無料、月に一回、毎回 10 組限定。（物資配布続いた）

10 月	ベビースマイル０歳児講座全４回	蛇田中央仮設集会室と生協で行った子育て情報交流
11 月	親子ビクス、親子ヨガ、親子でアートセラピー体験	「親子ビクス」はキッズとベビーに分ける
12 月	「お産と子育てにつよいまちづくり」（ボンボンカフェプロジェクト）発足	子供連れのお母さんだけではなく、ボランティアなども含め、参加できる場所として、仮設住宅に入った。
2012 年		
2012 年 1 月	親子ビクス、ベビーマッサージ、３B 体操	イベントを続きながら、1 月 31 日仮設住宅で震災により同居になった母親の座談会を行った。
3 月	震災文集発行「子どもたちへ～ママたちがいま、伝えたいこと～」	メディア等では詳しく知ることができなかった、被災地石巻で子育て中のママたちが震災当時体験したリアルを、そのまま形にした。1000 冊発行した。
4 月	NPO 法人格取得；妊婦～未就園児へのサロン始まる	fancl によるメイク・ハンドマッサージのイベント
5 月	「やっぺす」主催のプレーパークとのコラボ	親子ビクス、ベビーマッサージ、３B 体操なども続けていた
6 月	子育て情報のフリーペーパーの作成	フリーペーパーと同時にボンボンカフェチームの「リソースマップ」作りも始める。
7 月	3Ｂ体操、親子ビクスキッズなど	アレルギーがある子供に向け、生後７ヶ月～２歳の５組の親子が参加した
8 月	子育て情報誌作成（NO,1～NO,4）	イベントへ参加するのが難しい方へ情報誌を作成し、2000 部発行した。
9 月～10 月	ベビーマッサージ；フリーサロン；絵かきサロン＆子育て相談会；3Ｂ体操	専門家も巻き込んで知識を教える
11 月	子育てビックイベント「つながる子育て」～子育てママあつまれ～（ママシンポジウム）	父親も参加できるようなイベントである
12 月	子育てママ 3B 体操；親子ビクスキッズ；仮設住宅における子育てサロンなど	専門家も巻き込んで知識を教える

2013 年		
2013 年 1 月～2 月	ベビーマッサージ；親子ビクスベビークラスなど	向陽コミュニティーセンターを利用し、市役所より栄養士、保健師も参加した「赤ちゃんと栄養」「赤ちゃんと生活」を行った；蛇田生協集会室を利用し、３Ｂ体操などを行った。
3 月	子育てリソースマップ発行（ボンボンカフェプロジェクト）；200 部作成母子手帳と同時交付中	子育てが孤立にならないよう、社会や情報から孤立する出産前後の育児当事者を応援する冊子を作成、地域のリソースを上手に活用するため、2000 部発行した。
4 月	妊婦・子育てコミュニティカフェの開催開始	親子集まれる場所と提供し、交流などにより悩みを解消する。「ボンボンカフェ」を開成団地にオープンした。
5 月～9 月	ベビーマッサージ；親子ビクスベビークラスなど	イベントの場所には、石巻市向陽地区コミュニティセンター、みやぎ生協蛇田店、蛇田公民館、ほんだ母乳育児相談室（東松島） である。
10 月	平成 25 年度 健やか親子 21 全国大会「母子保健推進会議会長表彰」受賞	手作りサロン、親子ビクスなど継続。0 歳講座にはベビーマッサージ&ママの防災知識も始まる。
11 月	「東日本大震災復興支援事業リフレッシュママクラス開催」	
12 月	いきいきママ講座	中央公民館共催、毎月 3 回開催した。
2014 年		
１．２月	いきいきママ講座	中央公民館共催、毎月３回開催した。
3～5 月	「ボンボンカフェ」、０歳講座、3B 体操、ベビーマッサージなど継続	助産師、管理栄養士も参加に来て、専門知識を教える
6 月	子育てビックイベント「ベビスマ子育てフェスタ 2014」開催	未就園児だけでなく、対象不問。千人ぐらい参加した。
7～9 月	ボンボンパーク、3B 体操、たまひよサロン、ベビーマッサージ	助産師、管理栄養士も参加に来て、専門知識を教える

10 月	シンポジウム「ママと赤ちゃんの復興まちづくりＩＮ石巻」	被災地のママとして、体験したことおよび石巻市子育ての現状と今後の課題をほかの地域に伝える。
11 月	０歳児講座(全４回)、３B 体操、たまごひよこサロン、親子ビクスなど	助産師、管理栄養士も参加に来て、専門知識を教える
12 月	「やわらか抱っこ講座」石巻子どもセンター（子育て支援課）共催	クリスマスリース作り、しめ縄作り、クリスマス料理、たまごひよこサロン、ボンボンパーク、３B 体操、マタニティパーティなど継続
2015 年		
2015 年 1 月	０歳児講座(全４回)、３B 体操、たまごひよこサロン、親子ビクスなど	助産師、管理栄養士も参加に来て、専門知識を伝わる。
2 月	０歳児講座(全４回)、３B（ボール、ベル、ベルター）体操、たまごひよこサロン、親子ビクスなど	『お産と子育てリソースマップ』(2015) 出来た
3 月	石巻子育てメール「スマイル」配信開始	０歳児講座(全４回)、３B（ボール、ベル、ベルター）体操、たまごひよこサロン、親子ビクスなど継続。お産と子育てリソースマップ完成
4 月	マタニティ・子育てひろば「スマイル」プレオープン	石巻市役所委託事業始まる。10 時～15 時までオープンしている
4～8 月	０歳児講座(全４回)、３B（ボール、ベル、ベルター）体操、たまごひよこサロン、親子ビクスなど継続	子育てひろば『スマイル』・なかよし保育園子育て支援センター・ 向陽コミュニティセンター・開成団地「あがらいん」・あったかいホール（東松島）における各イベントやっている
8 月	石巻市での「父子手帳」作成開始	子育て中の父親７名募集し、月に２回程度、１２月まで８回の会議である。
9 月	『スマイル』新下沼から土和田に移転	月曜日から金曜日まで、10 時～15 時まで

（出典：「ベビースマイル石巻」のブログにより整理した）

2011 年３月 11 日発災から、子育て情報不足と感じ、友達の関係、居場所づくり支援物資の受け入れ配布などをきっかけで活動を始まった。

2012 年から、各場所を借り、イベント・サロンを行った。活動を通し、子育て支援の行政および民間情報が育児当事者は届いていないことを実感したため、文集と子育て情報誌を発行し、イベント・サロンには出てこれない方への情報を提供した。2012 年 4 月 4 日から 2013 年 3 月 31 日まで、参加された方の範囲および人数は石巻・東松島・女川における延べ 2700 人である。それとともに、震災以前からの子育て情報不足の課題が情報などが行き届きにくい状況から、子育てフリーペーパーを作成した。石巻・東松島・女川における未就園児の母親たちに 4 回、各回 2000 部、すでに延べ 8000 人へ提供した。

2013 年、震災により子育て環境の悪化を受け、妊婦・未就園児を対象とした支援活動として、ベビーマッサジ、メイク・ハンドマッサージ 、心のケアセミナー等 0 歳講座、たまひよサロン（母親教室)、親子ビクス、リトミック、３B 体操などを続きていた。4 月から、毎週同じ場所でイベント・サロンを開催し、コミュニティうと地域連携が強まった。親子の居場所づくり、震災後のケア、子育てネットワーク作りのため、4 月に 16 回、5 月に 21 回、6 月に 17 回、7 月に 14 回、8 月に 13 回、9 月に 22 回、10 月に 17 回、11 月に 21 回、12 月に 19 回、全 160 回のサロンを行った。

2014 年、親子のイベント・サロンが 1 月に 14 回、2 月に 17 回、3 月 18 回を続いて 49 回を行った。10 月、被災地の母親が体験したことおよび石巻市子育ての現状と今後の課題などを伝えるように、「ママと赤ちゃんの復興まちづくりＩＮ石巻」というシンポジウムが開催し、石巻の体験を教訓として、他地域が防災に取り組む中で女性の視点を入れた防災、まちづくりを展開している地域も増えてきた。

2015 年、妊婦～未就園児親子を対象とした支援活動を続けいているが、０歳親子は重点的になる。8 月から、石巻市役所の「少子高齢化課」と連携し、父子手帳の作成を始め、男性が子育てに関する役割の分担も求めていく。

5－1－2　参加者属性

平成 25 年度の事業報告書で、「親子のイベント・サロン事業」[1] について、「ベビースマイル石巻」に参加した 88 名の母親へのアンケートを行い、その結果は以下のようである。

１）年代別により、20 代 24 名、40 代 6 名であり、30 代 58 名であった。それにより、30 代の参加者は多く見られた。

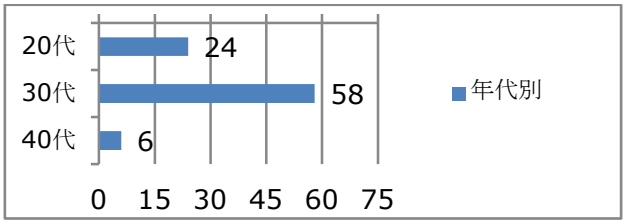


図 5-1　参加者の年代別　（出典：「ベビースマイル石巻」平成 25 年度の事業報告書により）

2）職業から見ると、フルタイム 4 名、パートタイム・アルバイト 6 名、現在育休中 14 名、未回答 1 名であり、専門主婦 62 名が多く見られた。それにより、働いていない女性が主な子育ての役割を演じっているかと考えている。

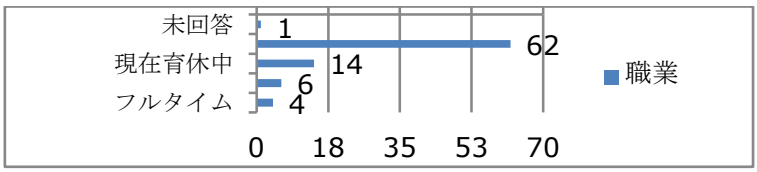


図 5-2　参加者の職業　（図 5-2：図 5-1 同）

3）活動を参加する時間により、初回参加者 17 名、参加以来 3 ヵ月未満、6 ヵ月未満、9 ヵ月未満、一年未満の参加者はそれぞれ 14 名、15 名、3 名、6 名であった。88 名の参加者の中で一年以上に参加したお母さんは 33 名で多く見られた。それにより、参加者の人数は増加していることを明らかにした。

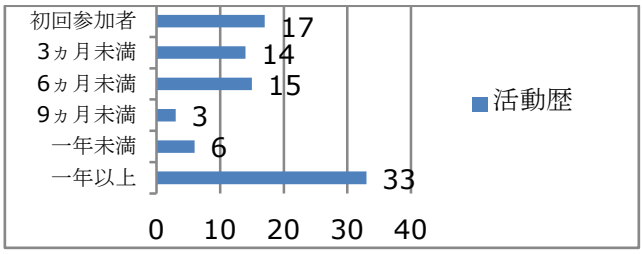


図 5-3：参加者の活動歴　（図 5-3：図 5-1 同）

4）活動内容について、講座に参加された方は 38 名、アクティビティに参加された方は 56 名、サロンに参加された方は 33 名、ほかの活動に参加された方は 12 名であった。それにより、アクティビティの参加者は多かったが、大きな違いがなかった。

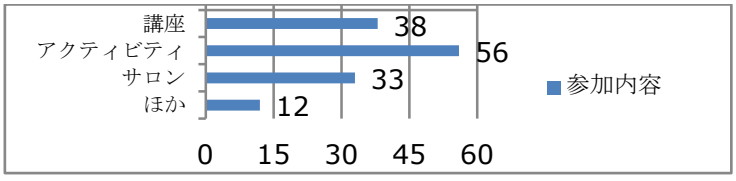


図 5-4：参加者の参加内容　（図 5-4：図 5-1 同）

５－２　参与調査の報告と考察

震災後、各施設における参加者の様子を考察するため、仮設集会所で開催しているイベントである「ボンボンカフェ」、および拠点として支援を行っているマタニティ・子育てひろば「スマイル」に参与調査を行った。

5−2−1　「ボンボンカフェ」について

調査日：2015 年９月 16 日　10:00〜12:30
場所：開成の仮設団地内にある集会所

コミュニティカフェ「Bond（絆）Born（(生まれる)）　Cafe」は「ボンボンカフェプロジェクトチーム」での活動を経て、2013 年４月 10 日にオーペンしてから仮設団地の集会所で毎週水曜日に開催しているイベントである。

場所は、宮城県石巻駅から約 4.3ｋｍ離れた開成第７団地にある「あがらいん」という仮設集会所である。



図５−５　「ボンボンカフェ」の場所（出典：Google　Map）

1） 施設



図５－６　「ボンボンカフェ」外観



（**図５－６「ボンボンカフェ」外観**:立った看板に掲示したカレンダー）

スタッフから毎週水曜日の 10：30～14 時まで、主に未就園児連れの母親たちが集まって、子どもを遊ばせながら、育児に関する情報交換等を行っている。参加者は週１回当たり 15 組～20 組程度である。

活動では、子供向けおもちゃは開所前にスタッフがアルコール消毒し、お茶、ジュース、コーヒー、また夏期間限定かき氷なども用意されている。乳幼児のいる母親に配慮して授乳室も設けられている。（図５－７）



（左：おもちゃのアルコール消毒）（写真出典：「ベビースマイル」ブログ）

（右：用意した飲み物）（撮影時間：2015 年 9 月）

図５－７　「ボンボンカフェ」の活動様子

10 時から子供連れの母親は「おはよう」と挨拶しながら玄関を入ってどんどん来た。スタッフからラベルをもらって子供の名前を書いてから体の裏に貼る。名付け子供の年齢は基本的には０歳から３歳未満である。



図５－７　活動様子　（2015 年 9 月）



図５－７活動様子：かき氷も自由に取る　（2015 年 9 月）

昼 12 時に被災者の自立支援を行っている「あがらいん」という法人との連携で、350 円

である予約制のランチも提供している。予約方法は前日メールで「ベビースマイル」に連絡する。お弁当の持ち込みもＯＫである。親子やスタッフと一緒ランチの準備していた。その後、母親たちが昼ご飯を食べながら話した。



図５－７活動様子：ランチ時間（写真出典：「ベビースマイル」ブログ）



図５－７活動様子：ランチ後の駄菓子タイムおよび読み聞かせタイム（写真出典：「ベビースマイル」ブログ）

2） 調査報告

昼、来た 15 組ぐらい親子のうちに利用者 9 名の女性に対して聞いたことにより、以下のことを明らかにした。（表５－２）

表５－２　参加者へのインタビュー結果

参加者	年代別	子供数	住所	職業	参加時間	参加するきっかけ	参加頻度
Ａさん	30 代	二人	大橋地区	専門主婦	2013 年	友人の紹介	月に 2 回（「ベビースマイル石巻」ほかのイベントも参加する）

Bさん	20代	一人	開成団地周辺	専門主婦	2015年	友人の紹介	ほぼ毎週
Cさん	20代	一人		専門主婦	2015年	友人の紹介	ほぼ毎週
Dさん	20代	一人		専門主婦	2015年	友人の紹介	ほぼ毎週
Eさん	30代	一人		専門主婦	2014年	友人の紹介	月に3回
Fさん	30代	二人		専門主婦	2014年	友人の紹介	ほぼ毎週
Gさん	30代	二人		パートタイム	2013年	友人の紹介	月に2〜3回
Hさん	20代	一人		専門主婦	2015年	病院でもらったパンフレット	ほぼ毎週
Iさん	30代	二人		専門主婦	2015年	友人の紹介	ほぼ毎週

Aさんは大橋の近くに暮らし、東日本大震災の時に家は浸水があったが、仮設住宅が利用してなかった。2013 年から「ベビースマイル」を参加している。参加するきっかけに関して、友人からの紹介である。子供は二人いるから、「ボンボンカフェ」以外は、主に２歳から３歳ぐらいの子供が参加する「ボンボンパー」というポロジェクトをよく参加する。

Bさん、Cさん、Dさんと話した。３名の女性は全て開成団地の近くに住んでいて、参加のきっかけについては友人から情報をもらって参加するという答えがあった。活動歴も全員一年未満である。

5 名の女性グループにインタビューにした。５名の中で４名は友達から紹介されたが、残りの一人は子供を産んだ病院でもらったパンフレットにより情報を知って自主的に参加した。職業について、４名は主婦であり、残りの一人は自宅でパートタイムである。

全体的には、参加者の属性は「ボンボンカフェ」に通っている母親たちはほとんど震災後から子供を産んで、開成団地の近くに暮らしている方であるが、仮設住宅・避難所を利用しなかった。

参加頻度について、「ほぼ毎週参加している」と答えた方が 6 名であった。「月に２～3 回」と答えた方が 3 名であった。そのうちに、1 名の子育て中の女性が「ベビースマイル石巻」で行っているイベントにも参加することがある。

参加者の属性に関する結果から見ると、「ベビースマイル」平成 25 年度事業報告書の中でアンケート結果とほぼ同じだと言える。年代別は 20 代、30 代の女性が多く、職業には多くの専業主婦が参加している。また、参加するきっかけには友達同士から紹介されて参加した現状により、子育て中女性の輪がひろがっていくことは明らかにした。

満足度を考察するため、子育てに関する悩みとストレスを聞いた。「初めて母親になって知らないことがあるから不安だ」、「雨の日も子供連れて遊びに行ける場所がほしい」、「ちょっとした自分の時間がほしくてもなかなか取れない」などのような答えがあった。それに対し、「ボンボンカフェ」が子供遊び場を提供し、子育てに関する悩みを話せる母親同士がいる。また、スタッフが子供を面倒してくれ、先輩と家庭問題などのストレスを語り合う時間があるため気楽になった。交流以外、おもちゃ作り、マッサージなどもあるから、水曜日用事があった時に行けなくなってもある程度ストレスが解消した。「ベビースマイル」への満足度は高いと考えている。

そのた、今度の調査から、石巻市の子育て環境に関する遊び場が震災前より増えたが、東日本大震災経験なしの母親たちは基本的な応急知識などを知りたいという事実は把握した。

5－2－2　マタニティ・子育てひろば「スマイル」

調査日：2015 年 12 月 12 日　10：00～15：00
場所：　石巻市蛇田字土和田 19-1

『マタニティー・子育てひろば「スマイル」』は平成 27 年４月１日にオーペンし、平成 27 年 9 月 26 日に石巻市地域子育て支援拠点事業の委託を受け、新下沼から土和田に移転した子育て支援拠点である。それは、人口増加が見込まれる蛇田地区における子育て世代へのサポート体制を強化するためである。



図５－８　マタニティー・子育てひろば「スマイル」の場所　（出典：Google　Map）

新たに整備した地域子育て支援拠点として、平日 10 時から 15 時までに親子が相互に交流できる居場所を提供している。イベントがある場合には土曜日も開放している。毎日大体 10 組～15 組の親子が来る。

働けているスタッフは５人である。そのうち、3 名が「ベビースマイル石巻」に参加した母親である。もう二人は 40 代である。30 代の母親が用事あって出勤できないと、40 代のスタッフが代わりに出勤に来る。子育てサポートにしているスタッフも毎回に２、３人が常駐しているが、基本的には、スタッフ午前２人、午後３人。

1)施設





図５－９　施設：外観および天井

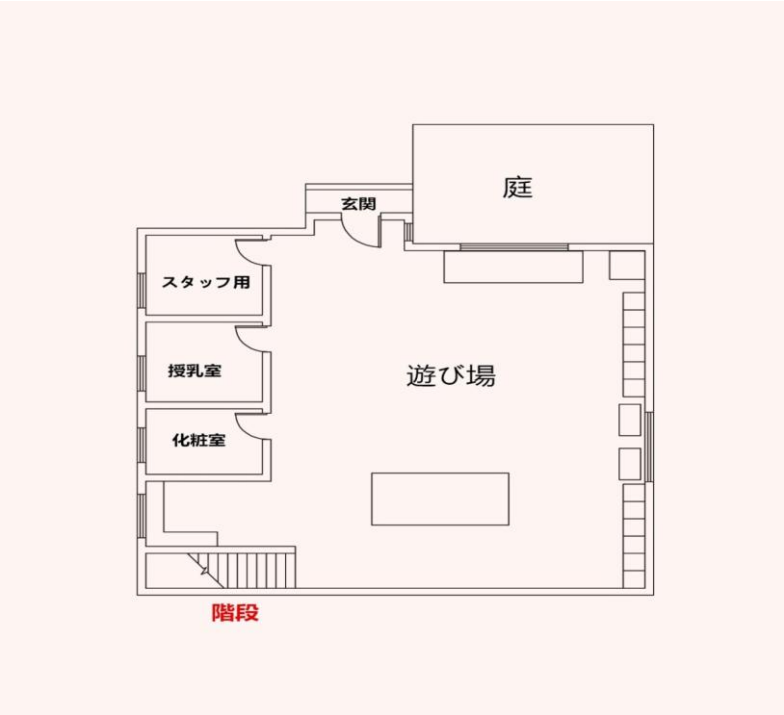


図５－９　施設：マタニティ・子育てひろば「スマイル」１階図面

玄関から右にスタッフ事務をしている室がある。左に各月の予定が書いたカレンダーが用意している。



図５－10　　玄関（左）、イベントのカレンダー（右）

木造２階建てで建物面積は約８３平方メートルである。１階に約２０畳の遊び場とフリースペース、乳幼児のいる母親に配慮している授乳室のほか、キッチンも設けられている。（図５－１１）

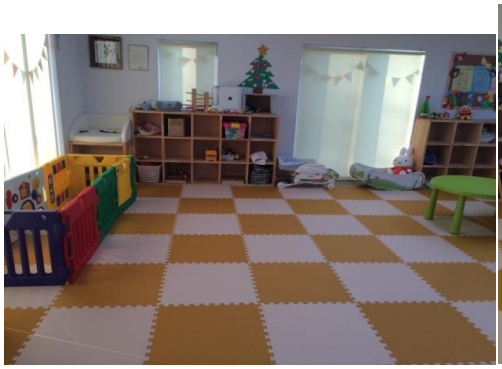
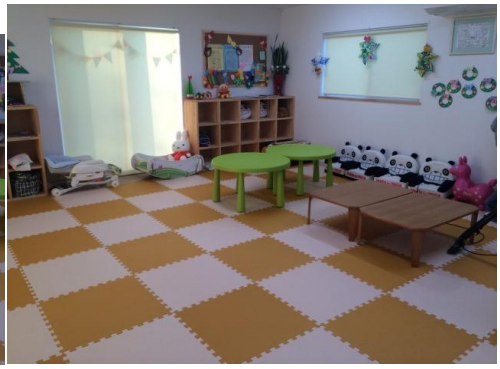



図５－１１：１階の遊び場

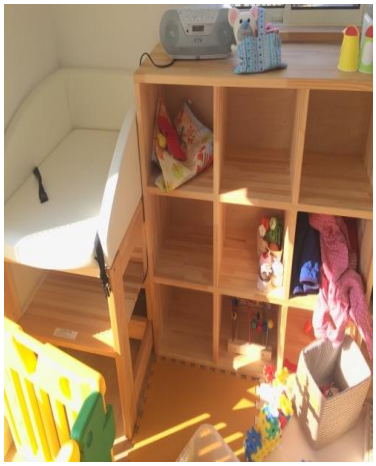



図５－１１：オムツ交換する場所、子供用寝具




図５－１１：参加された母親たちにより作った飾り

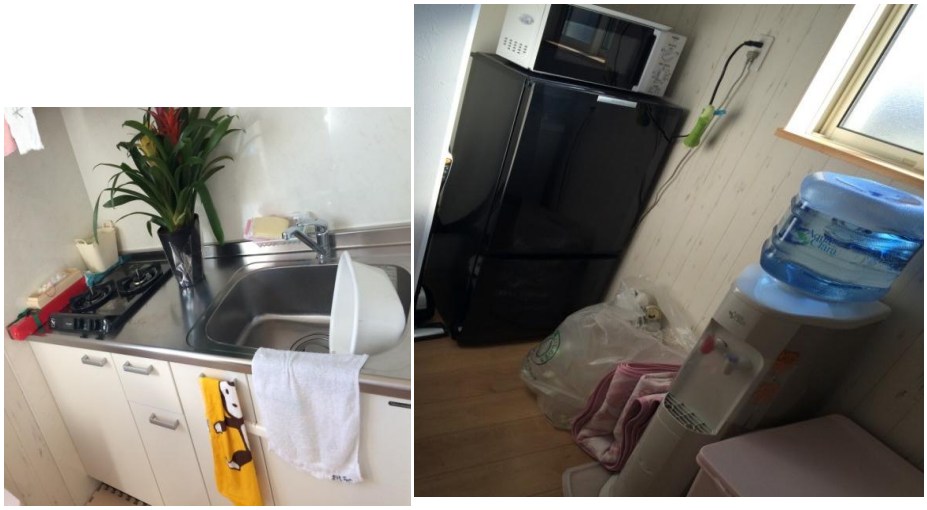


図５－11 ：1階における自由に使えるキッチン



図５－11 ：石巻の子育て情報チラシ、ＤＶ相談資料（左）、子育て知識に関する書籍（右）



（**図５－11 ：** １階に設置した子供の成長で使わなくなった服やグッズの交換箱）

初めて来た母親は、個人状況と子供のアレルギーなどの状況を含めた利用登録申請書の記入が必要である。（図５－１２）




（図５－１１：遊びの様子）

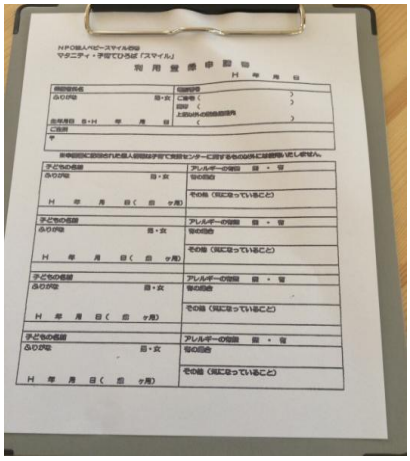


図５－１２：利用登録申請書

2 階は相談などに使う和室とする。講座、相談などの支援も行っている。（図５－１３）

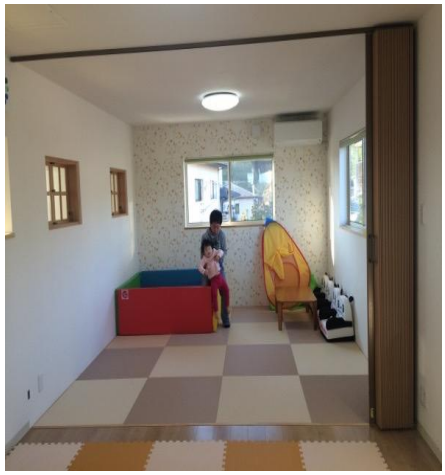



図５－１３：2 階の様子

2） 調査報告

午前 10 時から、スタッフ二人がいる。11：30 までは、どんどん来た親子は６組であっ

た。基本的には、母親同士の間に子育てに関する状況の話し、またスタッフと一緒子供の遊びにした。そのうちに、女性二人と話した。

現在妊娠中のＡさんは子供二人がいる。長男も小学校にいるから、『マタニティー・子育てひろば「スマイル」』に参加するのは２回目である。参加のきっかけについては、車で来るのは 10 分くらいのところに住んでいるから、たまに蛇田字土和田に来て、『マタニティー・子育てひろば「スマイル」』の外観を見た。妊娠中だから、安心して交流できる場所に行くため、参加してみようと体験した。

Ｂさんは子供が二人いる母親である。友達から紹介され、2015 年 2 月から参加し始まる。車で来るのは 10 分くらいのところに住んでいるが、週に２回参加している。しかも、午前だけである。それは、次男が 12 時から昼寝とするためである。『マタニティー・子育てひろば「スマイル」』に参加する感想については、「楽しかった」と答えた。静岡の出身で、2011 年に東日本大震災でボランティアとして石巻に来た時、ご主人と出会って石巻に引っ越しに来た。そのため、近隣関係などは地元の方よりちょっと浅いということがあった。家からちょっと離れた場所で同じような子育て悩みを持っている女性たちと共有しできることにより、悩みが解消されたということがあった。

12 時から、子供の昼寝により帰った親子は２組であった。スタッフ二人も順番に 30 分休みがあったが、一人のスタッフが帰った。12 時半に来るスタッフは子供二人連れって来た。この間、午前から残りの２組の母親の中で、一人の女性は自分の子供の面倒を見たが、もう一人が初めて来たため、子供を一時的に預けて分離し、子育て経験と参加する状況などについてスタッフと相談した。12 時半にグループとして初めて来た 3 組があった。この 3 組の母親が申請書を記入し、昼ごはんを食べながら話した。その後、子供がフルーツバスケット椅子取りゲームをしてから帰った。

午後 13 時から、５組親子が来た。そのうちに、3 名の母親へインタビューを行った。

20 代の女性Ｃさんと 20 代の女性Ｄさんがベビーサークルで知り合った友達同士である。2015 年 5 月から、『マタニティー・子育てひろば「スマイル」』に参加している。二人とも働けているから、月に１～2 回しか来れなかった。それ以外は、市運営している保育所は人気あるから入れなくて私立保育所に行くことにより、お金がかかった。仕事と子育てが両立しにくいということがあった。そのため、同世代の母親同士だけでなく、先輩の母親にも気軽に相談できる場所として、参加し続けている。

30 代の女性Ｅさんは、専門主婦である。2015 年 6 月から、友達から紹介され、一人の

息子を連れて参加し始まる。参加頻度については、ただ週に２～３回参加している。外で働きたいが、家庭の事情から外に出られなかった。震災後、盛り上げた内職についてはどう思いますかと聞いたが、在宅で働くことと子育ての役割がぶつかるから、ストレスも高くなると思ったと答えた。

来た 14 組の親子のうちに利用者 5 名の女性に対してインタビューをした。その結果を以下のように説明する。（表５－３）

表 5−3　参加者へのインタビュー結果

参加者	年代別	子供数	住所	職業	参加頻度	参加するきっかけ	その他
Aさん	30代	現在妊娠中（長男小学校生）	車で来るのは 10 分くらいのところ	正社員（現在産休中）	2015 年 12 月から、第 2 回目	外観を見って参加してみよう	・仕事がある、現在は産休中。 ・子供が産んだら、仕事続けたい。
Bさん	30代	二人	車で来るのは 10 分くらいのところ	自営業と任意団体やっている	2015 年 2 月から、週に 2 回参加する（午前だけ）	友達が紹介され	・静岡出身、3.11 大震災後にボランティアとして石巻に引っ越しに来た。 ・地元の人じゃないから、近隣関係には気になる。
Cさん	20代	一人	車で来るのは 5 分くらいのところ	会社員	2015 年 5 月から、月に 1 回～２回参加する	Dさんと「ベビーサークル」で知り合って、一緒に参加する	・子育てのことをよく話すが、職場などのことは話さない。 ・知り合いと交流だけ
Dさん	20代	一人	車で来るのは 15 分くらいのところ	会社員	2015 年 5 月から、月に 1 回～２回参加する	Cさんと「ベビーサークル」で知り合って、一緒に参加する	・「ベビースマイル石巻」以外は、保育所に行く。だが、市運営している保育所は人気あるから入れなくて私立保育所に行く
Eさん	30代	一人	車で来るのは 10 分くらいのところ	専門主婦	2015 年 6 月から、週に２～3 回	友達が紹介され	・ママ同士信頼関係があったら、悩みなどを共有しできると思う ・働きたくとも家庭の事情から外に出られない

5－3　まとめ

「災害時要援護者」というのは、要介護高齢者、心身障害者、日本語が不自由な外国人のみならず、妊婦、それて乳幼児も含まれた災害時に自力で避難することが難しいの人である。そういう概念から、乳幼児に対し、災害時に適当な避難情報の処理をするため、子育て役割を行っている保護者も考えなければならない。

子育て世帯は災害時にどのような特有のニーズに出会うのか、避難所ではなく、在宅で避難された親子に関する実態を把握するため、地域子育て支援拠点の役割を検討しなければならない。

表５－４　参与調査の比較

	コミュニティカフェ「ボンボンカフェ」	マタニティー・子育てひろば「スマイル」
設立時間	2013 年４月 10 日	2015 年４月１日
場所	仮設住宅の集会所（開成団地内）	内陸（石巻市蛇田字土和田）
運営時間	毎週水曜日 10：30～14 時	平日 10 時～15 時
団体・行政との連携	仮設住宅で支援活動を行う団体「あがらいん」	石巻市地域子育て支援拠点事業の委託
事業類型	拠点型コミュニティカフェ	地域子育て支援拠点
基本事業	①子育て親子の居場所づくり ②地域子育て関連情報の提供 ③子育てなどに関する相談の実施	①子育て親子の居場所づくり ②地域子育て関連情報の提供 ③子育てなどに関する相談の実施 ④講座などの実施
ほか	2012 年から場所を借り、活動開始	2015 年９月、場所移転した

「ベビースマイル石巻」の活動歴を通し、震災後から 5 年目になった現在、子供たちは幼稚園に行ったり、小学校に行ったりするため、0 歳から未就園までの子供向けのサロンなどにもあまり来なくなったが、ほかの親子に関するイベントにも参加する方もいることが把握した。なお、子育て支援活動の実施形態が多様化していくことも明らかにした。

また、今回の参与調査により、仮設住宅における「ボンボンカフェ」に参加された方は、震災時子育てしていなかったが、東日本大震災経験した母親と出会って、防災に関す

る知識が知りたい人が多かったと明らかにした。

「災害意識」は災害時における避難行動および平常時の災害準備にきわめて大きな影響を及ぼすと言われている。「ボンボンカフェ」は 2012 年から各場所を借り、活動を始まり、2013 年４月から仮設住宅にある集会所に常設の拠点施設を開設し、週 1 回 5 時間程度の親子が集まる場所づくりをしている。このような場所で、震災の経験を活かし、防災分野で女性の視点を入れ、女性の役割やリーダーシップを担う可能性には、講座などの形で東日本大震災発生時やそれ以降の具体的な事例、教訓を合わせ、参加された親子に伝えることはできないかについて考えている。

一方的に、内陸におけるマタニティー・子育てひろば「スマイル」に参加された方は、内陸に暮らしているため、災害に関する情報を求めることではなく、家庭分担の要求、就労意識が高い事実を感じ、求めている情報が共有できる仕組みを充実させることが必要だと考えている。このような場所で、世代間の交流が増えし、行政の連携とともに、地域での子育て支援を再築により、日頃からの信頼関係を作り、災害時にもネットワークの機能を持っている。

要するに、「ベビースマイル石巻」は地域子育て支援拠点とし、乳幼児、また子供連れの大人を合わせ、子育てに関する交流の居場所づくりをしながら、子育てについての相談、地域における関連情報の提供など支援活動を行っている。また、平時より地域から孤立しやすい子育て世帯の交流を促進し、震災時における特有なニーズが震災時だけでなく、平常時から配慮し始まった。例えば、拠点を閉じている間でも、子育て情報やイベントのお知らせなど通信手段も備えていた。

しかし、そのような拠点の持つ潜在的な役割などを発揮するため、通常事業以外の活動を支える仕組みが必要であると考えられる。例えば、震災時、車で拠点に行けない場合には、ほかの団体や行政と協力し、在宅避難している家庭への支援活動を展開することも検討すること。また、避難所および仮設住宅に直接的に支援を行うことは難しく、ネットワークの機能を発揮するように、ほかの団体の受け入れ、情報の収集や整理などを発信すること。

以上のことから、災害後に立ち上がった子育て支援団体の取り組みは、震災直後の情報発信、また心のケアなどのコミュニティーづくりから単なる親子の居場所から変化していたが、震災後の経験を生かせるように仕組みも続けていることも明らかにした。

注：１、「親子のイベント・サロン事業」：各施設を借りて移動型のイベント・サロン、および固定的な場所での拠点型のコミュニティカフェ

第六章　結論

6－1　本研究のまとめ

本研究では、東日本大震災後被災状況が高かった宮城県石巻地区を対象とし、災害時に弱い立場に置かれしやすい女性・高齢者向け支援を行っている団体の活動内容などについて現地調査を行った。それらの活動内容から、震災後立ちあがった団体の取り組みを把握した。また、参与調査により、次のようなことが明らかにした。

(1) 女性レジリエンスを向上するため、地域のネットワークが重要である。

震災直後、石巻地域で立ち上げた活動について、いずれの拠点でも子育て世帯の辛さと語られた。理由はいくつか挙げられたが、まず在宅に避難された世帯への物資や情報の不足であった。物資や情報を円滑に入手したいというニーズに対し、ニーズに適したプロジェクトを作り、避難所に配った物資と区別することである。次に、子育て女性たちが地域孤立しやすいため、乳幼児を連れた保護者への災害時の支援も含め、女性視点の反映、経済活動の再生などの取り組みが必要だと考えられる。

また、地域の復興に向け、地域で暮らしている人を巻き込んで、主体性を活かせるようにすることが重要である。例えば、「やっぺす」が行った「石恋」は石巻に住んでいる住民の趣味を合わせ、起業支援も行っている。「ゆめハウス」も地元の特色を活かし、産業の創出を求めている。

(2) 居場所づくりが復興において役割を果した。

第４章で取り上げた考察結果により、避難生活期の課題は、二つがあった。

まずは、避難所で子どもが夜泣きするため、周囲への迷惑を考え、避難所から出て行った家族も多く、乳幼児を抱える親への支援が必要であること。特に、子育て役割を担っている女性がストレスが高かった。次に、仮設住宅で暮らしている男性が、お茶会などの支援活動には参加が少なく、孤立化の懸念があったこと。

地域の現状を把握した上で、支援活動を行った団体・拠点の役割を明らかにした。震災後、親子が集まる場所を確保し、それにより親子ストレスを解消したいというニーズが指摘した。そのため、地域子育て支援拠点として、災害時の在宅子育て世帯向けの支援体制を構築することを提案する。

(3) 平常時から女性に対して長期的な視点に立った支援の必要性がある。

第三章を踏まえると、日常的なジェンダーの不平等は災害時、女性が弱い立場に置かせる可能性があると考えられる。宮城県石巻地区では、震災前女性の参画が不足な地域であり、また、震災後世帯・人口の減少、少子高齢化が加速され、多様性への配慮は課題とする事実が感じた。

一方に、震災後、女性が速やかに支援活動を行い、積極的な取組みを進んでいた。グループ活動が女性たちの社会的活動として機能を持っていた。このような活動を通じ、女性たちは経済的な自立だけでなく、家族や地域社会の発展にも重要な役割を担う可能性がなると考えられる。

そのため、社会の多様なニーズが反映されるように、平常時からジェンダーに平等な社会を創ることが重要だと言える。

(4) 女性の参画を求めるとともに、男性参加の促進も不可欠である。

女性への支援活動には、女性の参加だけではなく、男性の参加も重要である。石巻地区、女性の参画が不足であるが、男性の両立支援も進めていくという視点が不可欠と思われる。男性参加の促進にとともに、男女差を理解し、女性が担っている役割も分担できるではないか。

震災後、仮設住宅における男性の参加率が少なくなった原因は、プライドが高かった問題である。それに対し、女性が得意ではない分野における仕事を分担し、自らの生きがいも見つけた。いわば、女性の参画を推進するたま、男性を巻き込んで一緒に働くことも重要である。

6－2　今後の課題

今後の課題としては、以下の３点が挙げられる。

１）子育て支援について、二つの課題がある。一つは、今回の調査における、子育て支援について男性の役割などを考察しなかった。そのため、男女共同参画の一環とし、固定的な役割分担意識の変化を着目しながら、男性が長期的に子育てに関わる役割を考察していきたいである。もう一つは、子育て支援を行っている拠点は、緊急時に備えた避難施設とする可能性およびその利用のあり方を検討していきたい。

２）震災後、多くの女性たちが起業した事実を注目された。女性の起業成功・阻害要因などを分析するため、男女別に影響された社会的な要因を継続的に明らかにしていくことで

ある。

３）震災時、脆弱な立場に置かれる障害者が、震災後持っている回復力などを明らかにするため、調査を行う必要があると考えられる。

参考文献

第一章

１、内閣府『男女共同参画』「東日本大震災被災地における女性たの悩み・暴力（集中）相談事業報告書」:
http://www.gender.go.jp/whitepaper/h23/ze1ntai/html/zuhyo/zuhyo02-13-01.html
２、池田恵子（2012)「自然災害とジェンダー：バングラデシュと日本の事例から」,『世界の社会福祉年鑑 2012』(NO.12) 旬報社（東京), ｐ.17-34
３、池田恵子（2012)「災害リスク削減のジェンダー主流化：バングラデシュの事例から」『ジェンダー研究：お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』
４、遠藤恵子（2012)「災害とジェンダーをめぐる諸問題」『gemc journal（グローバル時代の男女共同参画と多文化共生)』ｐ.6-15
５、林春男（2012)「災害から立ち直る力＝レジリエンスを」『教育と医学』60（7）,632－641, 慶應義塾大学出版会
６、辰己佳寿子、山尾政博、ズルハムシャ・イムラム（2014)「津波被災地の復興における女性の役割 ―インドネシアのアチェ州と東北地方の比較を通して―」 『アジア女性研究第 23 号』
７、池田恵子（2011)「災害と男女共同参画をめぐる国際的潮流」 （災害・復興と男女共同参画 6.11 シンポジュウム)
８、池田恵子（2011)「災害脆弱性のジェ ンダー 格差とその克服 ―バングラデシュ ・チョコリア郡の事例に見る地域防災の可能性― 」
９、岡庭 義行（2013） 「『災害とジェンダー』におけるダイバシティの課題」帯広大谷短期大学紀要(第 50 号)2013 年 3 月

第二章

１、消防庁災害対策本部 （平成 27 年 9 月 9 日(月)14 時 00 分)「平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)について （第 152 報)」
２、石巻市市役所男女共同参画推進課ＨＰ：
http://www.city.ishinomaki.lg.jp/d0010/d0060/d0040/index.html
３、宮城県ＨＰ「特定非営利活動法人連絡先一覧（宮城県所管分)」(平成 27 年 8 月 31 日)

４、池田恵子（2014)「ジェンダーの視点から考える防災・減災～災害により強い社会の創生に向けて～」 p.34 図　第 209 回 FASID BBL セミナー

第三章

１、内閣府「平成 23 年版防災白書」
２、総務省統計局「労働力調査結果」
３、厚生労働省「被災３県の現在の雇用状況」
４、内閣府男女共同参画局「男女共同参画の視点による震災対応状況調査（平成 24 年 7 月)」
５、内閣府男女共同参画局　「東日本大震災からの復興に関する男女共同参画の取組状況調査（平成 25 年 5 月)」
６、石巻市市役所ホームページ：http://www.city.ishinomaki.lg.jp/

第四章

１、「石巻復興支援ネットワーク」ＨＰ：http://yappesu.jp/
２、「ゆめハウス」ＨＰ：http://onagawa-umineko.jp/
３、「ＮＰＯ子育てベビースマイル石巻｜宮城」ＨＰ：http://www.forbabysmile.com/

第五章

１、子育て支援 NPO 法人ベビースマイル石巻 公式ブログ：http://ameblo.jp/hiroria7/
２、「ＮＰＯ子育てベビースマイル石巻｜宮城」ＨＰ：http://www.forbabysmile.com/